

伊勢寺の傍に隠遁して終りしなるべし、慶安三年永井日向守直清碑を建つ、文は同じく羅山なり、

磐手杜

磐手村大字成合にあり、安満神社の神籬をいふ、又この村をば磐手里といふ、共に古より歌によめり、同村に磐手の故宮あり、俗に御所屋敷といふ、後鳥羽帝行宮の跡と言ひ傳ふ、

今續古君にしも秋をしらせぬ津の國の

馬内侍

いはての杜の我身ともかな

新勅 見ぬ人にいかゞ語らむ口なしの

讀人不知

いはての里の山吹の花

金龍寺

磐手村大字成合の山腹にあり、坂路凡八町、邂逅山紫雲院と號す、天台律宗にて本尊は普賢菩薩なり、開山堂、邂逅池、紫雲塔、能因櫻、池の坊舊跡等あり邂逅の池は古歌によめり、能因櫻は鐘樓の傍にあり、これは新古今集に載せたる、能因の「入りあひの鐘に花ぞちりける」の歌によりて、後世植ゑしものなるべし、本寺は、桓武帝延暦中參議阿倍是雄の草創にかゝる、初め安満寺といひき、其の後百餘年を経て千觀内供これを再營して、金龍寺と改む、邂逅山の名は、續古今集に載せたる千觀の歌「たまさかに見るたにさひし世のつねの雪のみ山を思ひこそやれ」とあるによれり、千觀

は中納言橘公頼の孫にて、相模守敏定の子なり、初め三井寺に入りて、顯密の法を學びしが、官寺の權豪を厭ひて、山林に隱れ、箕面寺よりこゝに來りて、池の側に庵を結びて幽居し、時々山崎の渡口に出で、自ら馬夫となりて、旅客の勞を惠み助けぬ、資性慈順にして、常に微笑を含めり、世人呼びて笑佛といひき、永觀元年入寂せり、開山堂にその影像を安す、慶長七年に至り、豊臣秀頼この堂を再興して六角堂となす、この中興は宗俊法印なり、

本山寺

原山、原池

清水村大字原の上方にあり、北山靈雲院と號す、南山の安岡寺と相對す、天台宗にて本尊は毘沙門天なり、開山堂は本堂の東にありて、役行者の像を安す本堂の後五町許に五水の瀧あり、方丈の南に忍惠上人の舊菴あり、當山の絶頂を天狗岩といふ、當寺は役行者の開創にして、その自ら刻みし本尊毘沙門天は、山城の鞍馬、大和の信貴と並び稱して、我國三毘沙門といふ、其後開成皇子堂舎を建立す、崇徳帝の大沼中に至り、この山麓に橘輔元といふ武士あり、父子癩を疾み、こゝの瀧に浴して平癒しければ、父子財産を喜捨して、堂塔を修造し、終に共に出家して、大原の良忍上人を師とし、名を良惠忍惠と改む、忍惠近衛帝の詔によりて、當山十八世となる、天正中諸堂、高山右近の爲に焼燼せられぬ、慶長

中に至り、豊臣内府秀頼、これを再建し、その後徳川將軍夫人桂昌院、これを修補して、今日に至れり、
原は姓氏録に攝津國諸蕃原首、眞神宿禰と同祖にて、福王の後なり
とあり、昔は原氏の居地と見えたり、上方の山を原山といふ、その
山脈神峯寺嶽よりつゞけり、その麓に原の池あり共に古歌によめ
り、

神峯山寺 旗立峠

寺は島本村大字大澤の上方にあり、根本山寶塔院といふ、天台宗に
て、本尊は毘沙門天なり、開山堂には役行者の像を安し、又光仁天
皇の塔あり、中興開成皇子父帝菩提の爲に、十三層の石浮圖を建て

られたるなり、
本寺は本山寺と同じく、役行者の開創にて、開成皇子の中興なり、
良惠上人（橋輔元）この谷に庵を結び、廿一年間念佛して往生せ
り、
大澤の後に旗立峠あり、丹波國南桑田郡樫田村大字田能へ出る所な
り、この峠は昔源義經一の谷へ赴く時に、旗を立てたる所とも、
また赤松圓心の屯せし所とも言ひ傳へたり、

安岡寺 服部神社

寺は原の下方服部村にあり、南山般若院と稱す、天台宗にて、本尊
は如意輪觀音なり、本堂、阿彌陀堂、開山堂、般若塔、鎮守祠等あ

り、本願は開成皇子にて、その弟子開智禪師の像を開山堂に安ず、
深草元政の遊南山般若院一記草山集に載せて、よく本寺の歴史什物
風景を叙したり、
服部村に、式内服部神社ありて、其地の生土神とす、昔は服部連
諸國の織部を司りしに、今は服部煙草とて、土人等煙草をつくれり、
また服部の古城址あり、松永久秀の築く所たり、

神南備杜

島本村大字神内にあり、神内は山崎街道櫻井の次村なり、古今集に
山崎より神南備の杜まで送りに人々まかりて歸りがてにして、別惜
みけるによめる、源實

人やりの道ならなくに大方は

いさうしといひていさ歸りなむ

とあり、又新勅撰集に宇治の關白、有馬の湯にまかりける道にて、
惜ニ秋暮一歌よみ侍りけるに、權大納言長家、
神なひの杜のあたりに宿かれば
暮れゆく秋もさぞとまるらむ

とある是なり、

櫻井驛

島本村大字櫻井といふ、昔は山崎街道の第二驛にして、京より西國
に下るもの、皆この驛によりぬ、今はさびれて一の村となれり、村

の西はづれに古松あり、その下に碑ありて楠公訣兒之碑と題せり、
元の大坂府知事渡邊昇男の筆なり、この所は、昔攝河泉三州の守贈
正一位楠正成公湊川に赴く時、その子正行公に訣別遺訓せし舊跡
にて、その事は太平記に載せて、普く人の知る所なり、遺跡の古松
數年前に枯れにき、櫻井の名は櫻井といふ井あるより起れり、昔は
櫻ありしと見えて、多く花をよめり、

夫木花を見し春の錦のなこりとて

木の葉色つく櫻井の里

夫木花ちりて春はくれにし櫻井の

名にだにありてむすぶ頃かな

撫子にかゝる涙や楠の露

爲家

知家

芭蕉

この句は楠公訣別のところをよめるなり、
この村に坂口八幡宮ありて、楠家菊水の旗を藏め、又山の手に寶城
庵といふ禪刹ありて、楠公の畫影軍器等あり、

待宵小侍從墳

同村櫻井の山手にあり、小侍從は石清水別當光清が女なり、近衛帝
の皇后多子に仕へて、和歌を善くせり、治承四年八月中旬、皇后の
兄、徳大寺左大將實定、福原より舊都に歸り、一夕皇后の宮に詣
て、月を觀て歸りける時、小侍從歌を詠じて、

待つ宵にふけゆく鐘の聲さけば

歸るあしたの鳥はものかは

といひしに、實定藏人して、

ものかはと君のいひけむ鳥のねの

今朝しもなとか悲しかるらむ

と返しぬ、これよりして待宵侍従と異名せられしこと平家物語、十訓抄等に載せたり、慶安三年永井日向守直清碑を建て、林羅山例によりて文を撰びぬ、

水無瀬宮

島本村大字廣瀬にあり、即ち櫻井の東なり、初め文徳帝第一の皇子惟喬親王、こゝに閑居して水無瀬宮と稱す、後鳥羽上皇もまた離宮をこゝに造りて徙りましますせり、後土御門帝明應三年に至り、勅使

を隱岐國に遣し、上皇の御靈をこゝに迎へ奉りて、水無瀬宮と稱す、其後上皇の親臣參議藤原信成、十世の孫權中納言兼成して、靈宮に奉祀せしむ、兼成の子孫代々これを掌りて、水無瀬宮と稱す、明治六年に至り、水無瀬宮に土御門、順徳二帝の御靈を合祀して、官幣中社に列し、水無瀬子爵舊例に従ひて宮司に補せり、按に信成七世の祖權中納言隆家（伊周大臣の弟）水無瀬と稱す、隆家こゝに閑居せしことありしと見えたり、この近邊水無瀬山、水無瀬瀧、水無瀬川、水無瀬渡、水無瀬里何れも古歌によめり、水無瀬川は水無瀬瀧の下流にて淀川に入る、攝津山城の堺なり、水無瀬渡は廣瀬より山城橋本へわたる渡、水無瀬里は廣瀬の舊名なり、

新讀 水無瀬山玉をみかきし跡とめて

讀人不知

忘れぬ里と月やすむらむ

壬二 水無瀬山せき入れし瀧の秋の月

家 隆

思ひいつるも涙なりけり

新古今 見渡せば山もとかすむ水無瀬川

太上天皇

ゆふべは秋となに思ひけむ

夫木 君を我交野の里にたのけみおきて

憲 盛

幾夜みなせのわたりしつらむ

遺拾 年をへて見しも昔になりけり

隆 親

里はみなせの秋の夜の月

この村に廣瀬神社あり、廣瀬、神内、櫻井、東大寺四村の生土神な

り、また阿彌陀院ありて、水無瀬家の菩提所たり、山崎の西に西觀音寺あり、後鳥羽上皇の「水無瀬山木の葉まばらになるまゝに尾のへの鐘の聲そちかづく」と御製ありしは、即ちこの寺の鐘にこそ、

關明神社 關戸院舊跡

同村大字山崎にありて、大山崎離宮八幡宮の西南にあり、これ即ち攝津山城二州の界なり、關戸院の舊跡は、この西にあり、故關の跡この邊にやありけむ、拾遺集に、源公貞が、大隅へまかり下りけるに、關戸の院に、月の明かりけるに、別惜み侍りて、平兼盛、遙なる旅の空にもおくれねば

羨まじきは秋の夜の月

とあり、また新古今集に、關戸院といふ所にて、霧中見月といふ心を、大江嘉言、

草枕ほとぞへにける都いて、

幾夜か旅の月にねぬらむ

とあり、こゝを過ぐれば、則ち山城國山崎なり、

武庫郡

摩尼山神咒寺

本國の西南に聳ゆる名山あり。海拔實に三千餘尺、武庫山又六甲山

といふ。名だかさ鐵拐ヶ峯鵬越等皆この山脈に在り。神咒寺は即ちこの山の東面の中腹兜山に在り。古義眞言宗にして役小角之を草創し、後淳和天皇の皇妃此に入り、空海を請して灌頂壇に入り如意尼と號し、如意輪の咒を修せらる。この時空海山頭の櫻樹を以て皇妃の尊像を造る、これ即ち當寺の本尊なり。承和二年淳和天皇行幸あり、寺田近里百丁を寄附せらる。如意尼は卅三才を期として同年三月この山にて遷化せられぬ。かゝる由緒あれば七堂伽藍聳えて僧房も多かりしが、世を経ると共に大破せしを、源頼朝梶原景時を奉行として再興せり。然るに天正年間伊丹の兵亂に全堂灰燼となりぬ。今の諸堂は徳川氏の時更に古趾によりて建立せしものなり。如意輪觀音堂、護摩堂、大師堂、卅三所觀音堂、荒神祠又鎮守等あ

り。その他本堂より北方八丁許に大井瀧あり、同じく南方三丁許に
廣田神影向石あり、同じく西谷一丁許に白龍石あり、同じく乾の方
八丁許に辨財天影向石あり、同じく上方一丁許に荒神石あり、又當
山の北裏に乾瀧あり、坤の方に鳴瀧あり。

寶塚鑛泉

阪鶴鐵道寶塚驛停車場より一丁

良元村大字伊子志にあり、この鑛泉は全く近年の發見にして、古來
その名さこえず。武庫川に添ひて風景よく、且つ汽車昇降に便なれ
ば、洛客日々に増加し、従つて旅館料理店等の新築せらるゝもの月
に盛なり。有馬を遠しとするもの、大方此の鑛泉に浴して鬱を散じ、
又夏時の暑を避く。蓋し阪鶴線中の一の遊園なり。

廣田神社

大社村大字廣田に鎮座したまふ官幣大社なり。史を按ずるに神功皇
后三韓を征したまはんとて、御船難波を指したまふ、時に船海中に
廻りて進むこと能はず、更に務古の水門に還りてトひたまひしに、
天照大神誨へて曰く我が荒魂は皇居に近くべからず、御心廣田の國
に居るべしと、即ち山背根子が女桑山媛をして祭らしむとある、こ
れこの御社の起元なり。延喜式によるに名神大月次相嘗とあり。清
和天皇貞觀十年十二月神階從一位を加へたまひしこと見ゆ。本社五
座の外に末社あり。一の鳥居より本社まで凡そ七丁ばかり松原遠く
つゞき石階高く築かれて、一たび此に入るものは物慾去りて心神澄

みゆくべし。新續古今、六條入道前大政大臣

けふまてはかくてくらしつ行末は

めくみひろたの神にまかせん

大國主西神社

西の宮大字市庭に鎮座す。祭神天照大神、素盞鳥尊、蛭見尊といふ。又域内に大己貴命、兒宮、宇賀神その他末社あり。鎮座の年代詳ならず。この神を何時の頃よりか彼の七福神の一なる惠美須と云ひなしより福を祈るための參詣者絶えず、ことに一月十日の祭には社前市を爲し人々群集すること稻麻のごとし。この日は阪神間の鐵道も、臨時汽車を出すを例とすることにて、その賑はしきを知るべし。

岡本梅林

住吉停車場より東北凡十五丁

本山村大字岡本に在り。こゝは古くより梅樹多く盛の頃は雅俗節を曳くもの少からず。殊に地は山を負ひ海を望み空氣溫暖なれば、最も散歩に適せり、例に依て掛茶屋休憩店等愛をたへて客を待てり。

菟原住吉神社

神功皇后三韓征伐の御凱陣の時祭られしと云ふ。今郷社に列せり。天照大神、八幡宮、神功皇后、三筒男神をまつる。住吉停車場の西方に在り。この神社より北方の山を御影山と云ふ。いはゆる御影石はこの山よ

り出づるなり。

○ 求塚

求塚一に處女塚と云ふ、これは昔二人の男一人の女を戀ひしに、女術なくて入水しければ、二人の男も同じく死にけり。土人之を憐んで塚を築きたりと云ふ。されば共に三塚あり。一は住吉村の東、一は六甲村大字東雲一は都賀野村大字味泥に在り。この男女入水の話は萬葉集九にも大和物語にも見えたり。従つて之に關する歌も少からず。今此に求塚を取出てたるは、必しもこの小説めきたる事をいはんものはあらず、彼の延元元年五月に足利の兵九州より押來り、官軍敗れて、新田義貞この塚に上りて、奮闘し小山田高家之に代り

て死せしにより辛うじて虎口を遁れたりし故蹟を知らしめんためなり。塚は田圃の中に小高くなりて上には松樹生ひ茂れり。此に立て當時を思ひやれば颯々の風も矢咄の聲にきくなされ、高家が忠死もそゞろに眼に映ずべし。

佛母摩耶山初利天上寺

都賀野村大字上野の上方にあり。古義真言宗なり。大化元年印度の法道仙人來りて創建せしと云ふ。上り口に閻魔堂あり。これより坂路十八丁一丁ごとに標石を立てたり。迂曲せる道を半以上登れば、攝津播磨眼下に在り、山頭に二王門あり、内外の石階都て百九十八階あり。上には夫人堂觀音堂、又更に奥の院あり。古へは僧房も多か

りしが、近年火災に逢ひて、今はやうく衰へたり。然れども空気が清爽眺望佳絶、雲上に居るの如き心ちするを以て夏季には避暑の客絶えず。別に旅館もなければ、僧坊にて精進料理をすゝめて宿泊せしむ。これ西攝の靈場ならざらんや。
赤松圓心が籠つて六波羅勢を拒ぎたりと云ふ城趾は、摩耶山上に在り。

河邊郡

多田神社

多田川に添ひて上れば、流に添ひたる一丘陵あり。即ち多田神社なり。

り。これ清和源氏の祖、源朝臣滿仲を祭れるなり。滿仲は六孫王經基の子にして、母は武藏守橘朝臣敏有の女なり。滿仲の若年の頃父經基に従つて東の方平將門を伐ち、西の方藤原純友を伐ちて功あり。廿四歳の時、源姓を賜はり、五十九歳の時、住吉明神の託によりこの多田莊に來り草賊を平けて城に入り、之を新田城と號せり。この地山岳崎嶇として、無類の要害なりしかば、遂に居を此處に定め後薙髮滿慶といひしが華山上皇の勅にて覺信と改めたり。覺信彼の三子美丈丸の命に幸壽丸の替りたるを聞き悲歎やる方なく、深く佛門に歸依し、横川の源信僧都に師資の契を結び、遂に城西二十餘丁の地に一寺を建立し、法華三昧院と號しけり。さて源賢僧都即ち美丈丸を以て住職とせしむ。これ多田院なり。院は伽藍宏大にして

正堂に釋迦を安し、本地堂に不動を安し、猶六所社、辨財天等の社ありしが、明治維新の際佛宇は總て之を毀ち、神殿のみを遺し、大阪府社として多田神社と稱することせり。
本殿には中央に滿仲を祭り、左に源頼信及び頼義右に源頼光及び義家を祭り。就中滿仲の肖像は、彼の源姓を賜はりし時の容を五十餘歳の後自ら彫刻せられたるものにて連戰芦毛の馬に乗り緋威の鎧を着し金鍔鮫鞘の太刀を佩き左右に弓箭を執り居らるゝものと云ふ。
本社の奥に神廟あり。これ八十八歳にして薨ぜられし後遺命に依て築きたるものなり。今は一つの森となりて石の玉垣を結ひ廻らせり。その遺命に、

吾歿後留置神於此廟窟可護弓箭家加之以當院鳴動兼而應
知見四海安危也また云々

源家之安危者可依當院之盛衰一滿仲判
かゝりしかば、歴代の武將崇敬大方ならず、文明四年鳴動の時、足利義政は正二位萬代守護權現の神號を献じ、又元祿九年東山天皇は詔して正一位を贈らせたまひき。この神廟の東方に頼光及びその連枝、西の方に足利十三代將軍の遺骨を分ち收めあり。
多田院と分離して後は、(多田院は神社の下の方に在り)參詣者反て少く、今は社殿のみ淋しげに建ちて境内草生じ、燈籠蜘蛛の巢にまとはれたるが少からず。たゞ春の頃は櫻多く、且つ暮春には躑躅咲きつゞくにより、京阪及び近郷の人々參詣するもの多しとぞ。

旗指山といふは満仲の旗を靡して諸軍の機を窺はれし處といふ。峰巒高く聳えて、この邊の秀嶺なり。新田古城の跡には鹽川伯耆守住

みたりしが、今にその跡知られたり。按るに六孫王の社は京都東寺の傍に在りて社宇も莊嚴なれども、彼頼義の城趾たる河内壺井八幡、及び源家の菩提寺たる通法寺、又頼信義家等の墳墓は荒草の裡に埋れたるとかみの條に述べしが如し。今や名分定まりて列朝の忠臣義士等或は別格官幣社の特典に列せらるゝ者もあるに、將門純友征討以來、前九年後三年の大役の如きは悉くこの數代の人々にて平定せられしに、通法寺の荒廢、偕はこの神社の物淋しげなる、誰か思はゞ涙を流さざる者あらん、況や清和源氏の裔孫は、今日華胄の中に堂々たる門標を築

き居るものあるに於てをや。

鼓が瀧屏風巖

鼓が瀧は、多田川の下流、多田院より八丁ばかり南に在り。川流急にして飛泉迸り落つ。街道より能く見おろさる。但し寛文年間に多田院再造の時、この岩石を斫りしより、いはゆる鼓の響絶えたりと云ふ。屏風巖は、多田川の上流大字大井に在り。岩石大小六枚屏風のごとく、立てり。高さ凡廿間餘幅十間ばかり。水流は例によつて急なり。岩上に丹波篠山の通路あり。躑躅の頃は、滿岩紅白を帯び流に映じてまたなき絶景といふ。

平野 鑛泉

これはゆる平野水なり。多田村大字平野より出づ。昔は湯本町の中間に一大浴室を設け、衆人を浴せしめしが、今は大におとろへて、たゞその鑛泉のみを輸出することになれり。

忠孝山小童寺

多田莊西畝野村に在り。彼的美丈丸の爲に身替し藤原仲光の子幸壽丸の菩提を弔ふために、美丈丸即ち源賢の開基せるものなり。されば本堂の外に、幸壽丸塔仲光の塔あり、又美丈丸塔、平井保昌塔源綱塔等あり。幸壽丸が辭世に云く。

君がため命にかはる後の世の

よみちをてらせ山のはの月

美丈丸及び幸壽丸の墳墓は武庫郡津戸村昌林寺の境内に在り。

神秀山満願寺千手院

多田神社の西南に在り。聖武天皇神龜元年勝道上人開基す。金堂、常行堂、観音堂、釋迦堂等あり。源満仲多田に城を構ふるに及て、大に之を歸依し、子美丈丸を僧として此に居らしむ。依て多田源氏一門塔（伊豆守國房、出羽守光國、下野守明國、下總守仲政、山縣三郎國直攝津守行國、兵衛大輔藏人國基）及び美丈丸幸壽丸仲光等の塔あり。奥院に千手観音を安置す。後醍醐天皇正中二年天台座主

二品法親王奏して官寺とせられしより、世の崇敬大に増し貴賤男女の禮謁するもの多かりしが、後火災にかゝり、僅に奥の院のみ免れたり。慶安年間寺僧義損金を募つて更に建立せしが、今の院なり。是より西南八丁ばかりゆけば、西明寺瀧あり。高さ五丈にあまれり。巨巖多く溪流のうづまくさまなど一見の價あり。是よりや、放れて、寺田村に藤原仲光の墳あり。これその邸趾といふ土人藤原塚といへり。

紫雲山中山寺

中山寺は長尾村大字中山に在り。聖徳太子の開基にして本尊十一面観音なり。薬師堂地藏堂、太子堂、等ありて西國巡禮廿四番札所なり。

り。この地もと仲哀天皇の先妃大仲姫の墓所なり。妃の御子麿坂王忍熊王、神功皇后に敵して滅びたまひ、麿坂王は六甲山に葬り、忍熊王は宇治川に流れ難波浦に漂ひて、崇りをなされしかば、應神天皇勅して、その母大仲姫の傍に葬らしめらる。時に忍熊王忽ち白鳥に化して、岩間より靈泉湧出せり。今の本山大悲水は即ち是なりといへり。然るに厄難病苦の者この水を掬すれば忽ち効ありといふより、參詣者多し。本社には即ち大仲姫、忍熊王疫神を祭れり。奥院あり。本堂の山上にあり。この寺古く悉く山巔にありて僧房八十院に及びしに、天正の兵火にかゝりてより、今の地下院に遷したり。こは豊臣秀頼の假に建營せられしものといへり。毎年舊曆三月中旬八月中旬には無縁經修行あり、又七月九日に千日詣にて賽者多

く、爲に臨時汽車を發することあり。山上より見れば、尼崎西の宮の浦々遙に聯なりて、沖の釣船かすかに、風光の絶景なる、蓋し本郡中第一なるべし。夫木集に道經冬寒み猪名の中山こえくれは

櫓のかれはにあられふるなり

崑崙山昆陽寺

稻野村大字寺本に在り。古義眞言宗にして、天平五年に僧行基の開きし處なり。行基は五畿内に四十九院を建立せし人にて、その道の聖と仰がれたる僧なり。本尊薬師如来開山堂大日堂觀音堂護摩堂等數字あり。開基のいはれは天平勝寶元年に雕りし古鐘の銘文に委

し。古今攝津第一の名刹と稱せしを、天正の兵火に罹りて悉く灰燼となりぬ。今なるはその後に建立せしものなり。

古く昆陽の浦昆陽の入江などいへるを思ふに、この邊は西海につまると、江なりしなるべし。夫木集に

津の國のこやのうら風音つれて 範 光

蘆の枯葉に秋は來にけり

讀人不知

しけりあふこやの入江のあしのはに かくれはやらてゆくほたるかな

といへるなど思ひ合すべし。

この寺より五丁ばかりゆけば、名高き昆陽池あり。行基の堀らしめしものといふ。周廻五千餘畝とぞ。千載集經房

をし鳥のうきねの床や荒ぬらん
氷柱るとけりこやの池水

この外歌おほし。

猪名篠原

伊丹の南街道の東に方三間ばかりの笹原あるをいふ。古へはいと廣かりけんを、段々と開けて、今はそのかたのみ遺し、ものと見ゆ。かの大貳三位が「おののさゝ原風ふけば」といへる歌より世にその名たかし。この邊總て猪名野といふ。古くは遊獵の地たりしなり。三代實錄に詔賜左大臣從一位源朝臣信攝津國河邊郡爲奈野爲遊獵之地とある考ふべし。

拾遺 しなか鳥のふし原とひわたる

讀人不知

鴨のはおとのおもしろきかな

土御門院

續遺 見わたせばましますきも霜かれて

みどりすくなきるなのさゝ原
又猪名寺といふあり。古は伽藍盛大なりしも、今はその趾のみ遺れり。

高師直塚

稲野村大字山田に在り。太平記を按ずるに、觀應二年二月廿六日高師直師泰兄弟都を落ち通世者に紛れ、蓮の葉笠を傾け、袖にて顔を隠しつゝ、武庫川を渡りて小堤の上を過ける時三浦八郎左衛門が

中間二人走寄りて師直を討取り、吉江小四郎師泰を討取たりとあり。之に依り後人憐んで此地に葬れりと云ふ。思へば四條繩手にて、この勢の爲に討死せし楠正行は、今は官幣社に祭られて萬人に仰がれ、師直師泰の末路はかくのごとし。人として義を取り仁を爲さずば、いかに一旦の榮花を得とも、浮雲よりもはかなかるべし。

伊丹町 阪鶴鐵道伊丹驛

この町池田町と全しく、清酒醸造にて世に知らる。戸數千七百人口七千餘といふ。停車場あり。本郡中の都會なり。

神崎 阪鶴鐵道神崎驛

古へは神崎渡とて、江口渡と並び稱せられ、最も繁華の地たりき。神崎川は淀川の支流にして、川上にては吹田川三田川といふ。停車場ありて繁華おとろへず。山陽鐵道阪鶴鐵道

尼ヶ崎

神崎停車場より凡そ一里ばかりの地なり。停車場あり。舊櫻井氏の封地にして佐々成政の自殺せし處今は人口一萬餘市街頗る繁榮せり。この地海岸にて近時海水浴にゆくものおほく、従つてその旅館等數多建てり。尼ヶ崎城址（足利時代に細川尹賢居城、後荒木村重、池田信輝、戸田氏鐵等修築す）大物浦源義經旅宿の跡（大物橋詰に在り）などいふ處あり。南は海路泉州紀州につゞき、西は播備

に通^{とほ}りて、山陽道の咽喉^{いんこう}なり。こゝより鳴尾^{なるを}、西宮^{せいのみや}、打出^{うちで}、五百崎^{いほさき}、御田^{ごでん}、御影^{みかげ}、大石^{おおいし}、脇濱^{わきはま}、神戸^{かうべ}、兵庫等^{へうさとう}をかけて、灘^{なだ}といふ、清酒^{せいしゆ}の醸造^{やうざう}を以て名高^{なだか}し。

有馬郡

有馬温泉

我が國^{わがくに}温泉^{おんせん}多しと雖^{いへど}も、その發見^{はつけん}最も古^{ふる}くして、最も名譽^{なめいよ}ある歴史^{れきし}を有^{いう}せること有馬温泉^{ありまおんせん}に如^しくものなし。この地^ち兵庫縣^{へうさけん}有馬郡^{ありまぐん}武庫山^{ぶこやま}の西面^{せいめん}、海拔^{かいばつ}一千一百五十五尺^{しやくとこみくろむ}の處^{ところ}に位^ゐせり。有馬山^{ありまやま}とも又鹽原山^{またしほらやま}ともいへり。峯高^{みねたか}く水清^{みづきよ}く、空氣爽^{くわいきさば}やかかなり。東南西^{とうなんせい}は山^{やま}につま

れ北^{きた}一方^{いっぽう}僅^{わずか}に開^{ひら}けたれば、寒氣^{かんき}強^{つよ}く、初冬^{しよたう}に至^{いた}らざるに霜雪^{さうせつ}を見ることあり。かゝれば盛夏^{せいいか}の候^{こう}と雖^{いへど}も、寒暖計^{かんたんけい}は八十一二度^{はちじゅういちど}を超^こえず、避暑^{ひしよ}には最^もも適地^{てきち}なり。市街^{しがい}は山^{やま}に倚^より丘^かに添^そひて造^{つく}られ、旅館^{りょくわん}商估軒^{しやうこのき}を並^{なら}べて、別天地^{べつてんち}をなせり。浴場^{よくぢやう}こゝは箱根熱海^{はこねあたま}等^{とう}のごとく、旅館^{りょくわん}毎^{ごと}に湯^ゆを引^ひきあるにあら^らず、市街^{しがい}の中央^{ちゆうあう}に共同^{きゆうどう}にて一大浴場^{いちたいよくぢやう}を設^まけありて浴客^{よくかく}は各所^{かくしよ}よりこゝに通^{かひ}ひ浴^{よく}する法^{ほふ}とせり。その浴場^{よくぢやう}を宮殿^{きうでん}作り^{つく}りにして、一等室^{とうしつ}及び通常室^{つうじやうしつ}の設^まけあり。孰^{いづ}れも湯^ゆは底^{そこ}の石^{いし}の間^{あひだ}より湧^わき出^いづるを、二坪^{ふたば}ばかりにしきりて入^いるに便^{べん}ならしむ。その場所^{ばしよ}即^{すなは}ちながしは石^{いし}にて疊^たみたれば、湯^ゆは常^{つね}にさらさらと流^{なが}れ新陳代謝^{しんちんだいしや}して、すこしも汚垢^{あか}を留^{とど}めず。浴料^{よくれう}は一等^{とう}は一人^{ひとり}より二人^{ふたり}までは金十五錢^{きんじゅうごせん}、通常^{つうじやう}は二錢^{にせん}

なり。時間は毎日午前五時より午後十一時までとす。
旅館には湯女と稱するものあり。老若二様ありて老いたるは大湯女
と稱して何れもかゝと呼び、若きは小湯女と稱して旅館によりて昔
より一定の名あり。即ち兵衛はみや、御所坊はまさ二階坊はふぢ池
の坊はまつ、中の坊はつね休所はたけ奥の坊はなつ、若狭屋はいち下
大坊はしげ、禰宜屋はすき尼崎坊はゆり横の坊はたつなり。是等は
客の浴場に至る時は必ず隨行して衣類履物萬端の世話をなすなり。
古は眉毛をそり鐵漿をそめ帯を前に結たりしといへども、今は普
通の風に改めたり。
入浴するには心得あり。嘗て眞部陸軍々醫正の記されたるものあれ
ば左にかゝぐ

温泉入浴十五則

- 一 遠來の病人疲れたれば暫時休息して俄に入浴する勿れ
- 一 老人小兒并に虚弱の病人は最初より數回又は長浴する勿れ
- 一 壹週間は一日二回其後は三回十分より廿分間に過る勿れ
- 一 飲食後並に空腹の節身體つかれたる時直に入浴する勿れ
- 一 入浴中静なるべし大聲或は湯中に潜り或は温泉を飲む勿れ
- 一 入浴中大酒暴飲は慎むべし飲食後は必散步して寝ること勿れ
- 一 入浴中房事は禁し居れ共但妊娠を求むる人は格別猥に交接する勿れ
- 一 惡寒、發熱、頭痛、眩暈等あれば平癒する迄強て入浴する勿れ
- 一 風雨寒冷の節は入浴後薄衣にて外邪に感すること勿れ
- 一 入浴前必湯あみしてよく身を温むべし冷たるまゝ入ること勿れ
- 一 子宮病ある婦人は器械を湯宿に供用し下腹をひやすこと勿れ
- 一 入浴後濕たる浴衣は速に脱ぎ替へ濕氣を吸收することなかれ
- 一 入浴後は發汗すると衣服を脱ぎ邪氣に冒さるゝことなかれ
- 一 固有の持病發作の氣味あるときは決して入浴することなかれ

一種々の病症によりて入浴の効顯は温泉論に詳なれ共尙其醫に聞くべしみにたりに入浴することなかれ

明治十六年十月一日

右は入浴心得の大略なりなほ温泉の成分効用を知らんと欲せば分拆表に記載せり

正七位勳五等眞部忍謹誌

温泉の性質及び効能 これは嘗て内務省大阪司藥場雇教師へ、ウ、ド

ワルス氏の分拆表あり。左のごとし。

格魯兒那篤留母	一四、七一七瓦	硫酸加爾叟母	〇一四
臭素那篤留母	、一〇五	格魯兒亞兒密紐母	〇二九
格魯兒伽留母	一、二八一	酸化滿俺亞酸化滿俺	〇五五
格魯兒安謨紐母	、〇一三	酸化鐵	、二四六
格魯兒利知鳥母	痕跡	硅酸	〇五八
格魯兒麻偏涅叟母	、二四一	機性物質	僅量

格魯兒加爾叟母 二、八九六 固形分合計 一九、六五五瓦
 旅館 には昔仁西上人の藥師十二神に像りて十二坊を置しを初め
 として (歴史部参考) 數軒あり。即ち左のごとし。

兵衛 即北 風早喜右衛門	御所の坊 金井四郎兵衛
二階坊 佐々木孝太郎	池の坊 久武直之助
中の坊 梶木源之助	休所 杉本松太郎
奥の坊 淺野仙太郎	若狭屋 田中雄三郎
佃屋 佐々木文藏	下大坊 山下庄右衛門
禰宜屋 増田兵右衛門	清水 清水靈延
櫛屋 杉本時松	ホテル 増田卯三之助
尼崎坊 岸本久吉	浦野屋 余田兵吉

阪 口 福 本 ふ さ 三 輪 屋 三 輪 庄 太 郎
 横 の 坊 松 岡 儀 兵 衛 稻 荷 兒 玉 つ ね
 宮 原 本 城 た ま 三 開 樓 藤 木 常 次 郎
 田 中 屋 余 田 左 橋 右 衛 門 灰 吹 屋 西 田 彌 吉
 八 幡 屋 杉 本 い と 西 岡 西 岡 か め
 立 花 屋 川 島 治 助 若 松 屋 若 松 小 三 郎
 中 井 屋 中 井 と み 三 田 屋 三 田 孫 助
 孰 れ も 三 層 樓 若 く は 四 層 樓 も あり、 別 荘 を も 有 し て 建 築 壯 麗 室 内 清
 浄 な り。 是 等 は 旅 籠 附 贈 と 席 貸 自 炊 贈 と の 二 様 あり。 客 の 好 み に 應
 ず。
 炭 酸 水、 温 泉 を 距 る こ と 東 南 三 町 ば かり の 上 に 在 り。 古 は 毒 水 な り。

と して 近 づ く も の な か り し が、 明 治 六 年 に 司 藥 場 に て 檢 査 せ し に、
 全 く 善 良 の 炭 酸 水 な り し か ば、 急 に そ の 鑛 脈 を 尋 ね て 多 量 に 導 き 出
 す こ と、 せ り。 今 は こ の 湧 出 す る 處 を 圓 形 の 石 に て 築 き た る に、 清 く
 澄 み た る 水 さ ら く と 流 れ 落 ち た り。 又 雨 な ど の か、 ら ぬ や ら に、
 そ の 上 に は 御 殿 風 の 屋 宇 を 築 き あり。 飲 ま ん と す る 時 は、 そ の 傍 の
 小 舎 に 付、 預 人 に 事 の 旨 を 告 げ ば、 コ ッ プ と 砂 糖 と を 持 ち 出 す べ し。
 こ れ を こ の 水 に 和 し て 適 宜 に 飲 む な り。 胃 弱 溜 飲 疝 癪 風 毒 等 に は 最
 も よ し と い へ り。 こ の 水 を 鐵 砲 水 と 稱 し、 瓶 詰 に し て 大 阪 そ の 他 諸
 方 に 輸 出 す と い ふ。 又 こ の 水 を わ か し て 炭 酸 湯 及 び 炭 酸 冷 浴 場 等 を
 そ の 傍 に 造 れ り。 そ の 他 休 憩 所 の や、 大 なる も の あり て、 球 突 揚 弓
 等 の 遊 具 を 供 へ あり。

この他花の湯（一に新湯と云ふ）あり、妬湯あり、眼洗湯あり、願
の湯あり。共に本温泉場より遠からず。
鳥地獄虫地獄あり。炭酸水の近傍に在り。又血の池といふあり。い
づれも炭酸のしわざより起れる稱なり。
歴史及び文苑、當温泉は神代の昔、大己貴命少彦名命發見せられ
たりといへど、その詳なること知られず。史を按ずるに舒明天皇こ
の温泉に行幸したまひしこと兩度、彼の有間皇子は、實に天皇の皇
后御子なきを歎かせたまひ、こゝに御入浴ありし後生ませたまひさ
といへり。孝徳天皇もこゝに行幸あり。聖武天皇の朝に及びて、行
基菩薩大にこの温泉の効を識り、薬師堂を興し、この地を盛にせり。
夫より數世を経て、白河天皇またこゝに行幸あり。然るに堀河天皇

承徳元年淫雨洪水の爲めに、一度は大におとろへしを、後鳥羽天皇
建久年中、大和國吉野高原寺の住仁西上人、來りて之を再興し、寺
院を建て、薬師十二神に像つて十二坊舎を營み、各湯守を置けり。
是より大に榮えたりしを、享祿元年及び天正四年大火ありて温泉人
家等悉く焼土となりたり。同十三年太閤秀吉更に之を修理し、公及
び夫人も屢々入浴あり、やゝ本に復せしに、慶長元年大地震のため
に、重ねて破損せり。太閤夙にこの温泉の効を認め居りしかば、有
馬の奉行に令し、更に修理せしめて、舊に復せしといふ。夫より日
を逐うて繁榮し、以て今に至れり。
この地古より有馬六景同十二景など、字せらるゝ所ありて、文人墨
客に玩ばるゝこと久し。先づ瑞寶寺川に出て杖棄橋を渡り右曲する

と數丁なる時は、瑞寶寺に至る、この地や、高燥にして幽靜なり。
初秋の萩暮秋の紅葉近傍稀なりと稱せらる。その山の崖下に太鼓の
瀑あり、その對岸に聳えたるを功地山といふ。松緑にして峯優に最
も月に名あり。又灰形山あり、これに對して有明櫻あり。此は一の
小遊園にして花の頃は雑踏を極むと云ふ。風流の建碑等あり。之に
つゞきて鼓が瀑あり。巖にだけ落るにその響鼓に似たるより名に
負へりとぞ。又滑瀑高塚清水龜尾瀑等あり。山に愛宕落葉あり、寺
に藥師堂、極樂寺、念佛寺、善福寺、林溪寺等あり、天神社あり、
稻荷社あり、温泉神社は、延喜式内の神にして、愛宕の山腹に祭ら
れたり。

新千載 津の國のむこの奥なる有馬山

右兵衛基氏

ありとも見えす雲ぞ棚引

順徳院御製

夫木 有馬山峯の松風音さえて

猪名のさゝ原うつらなくなり

近衛攝政大政大臣内前

有馬六景詩歌

鼓瀧松風

山松のあらしになをもひびくかな
つゝみかたきの水のしらへは

九條内大臣道前

有明櫻春望

千枝二月曙雲開、無限春風馥郁來、爲是温泉洵美地、春花偏

歴異郷催

飛鳥井大納言雅重

巧地山秋月

鹿の音もふけゆく夜半の山のはに

すみのほる月の影のさやけさ

落葉山夕照

四辻大納言公亭

落葉之山名故奇、斜陽風景更堪思、懸知勝地常多賞、最在

丹楓滿墜時

温泉寺晚鐘

閑院大宰帥典仁親王

いく星のくれおとろかす聲ならん

この山寺の入相のかね

有馬富士雪

九條左大臣尙實

東海芙蓉元等名、三峰千歳雪華清、何疑爲浴温泉者、好

拵南山北壽榮

名産竹細工筆等古より名高し、
木地の挽物の器具も品々あり。

いづれも賞するに足る。

通路 生瀬よりは二里廿七丁三

田よりは二里強共に人力車の便

あり。生瀬よりは、道や上下

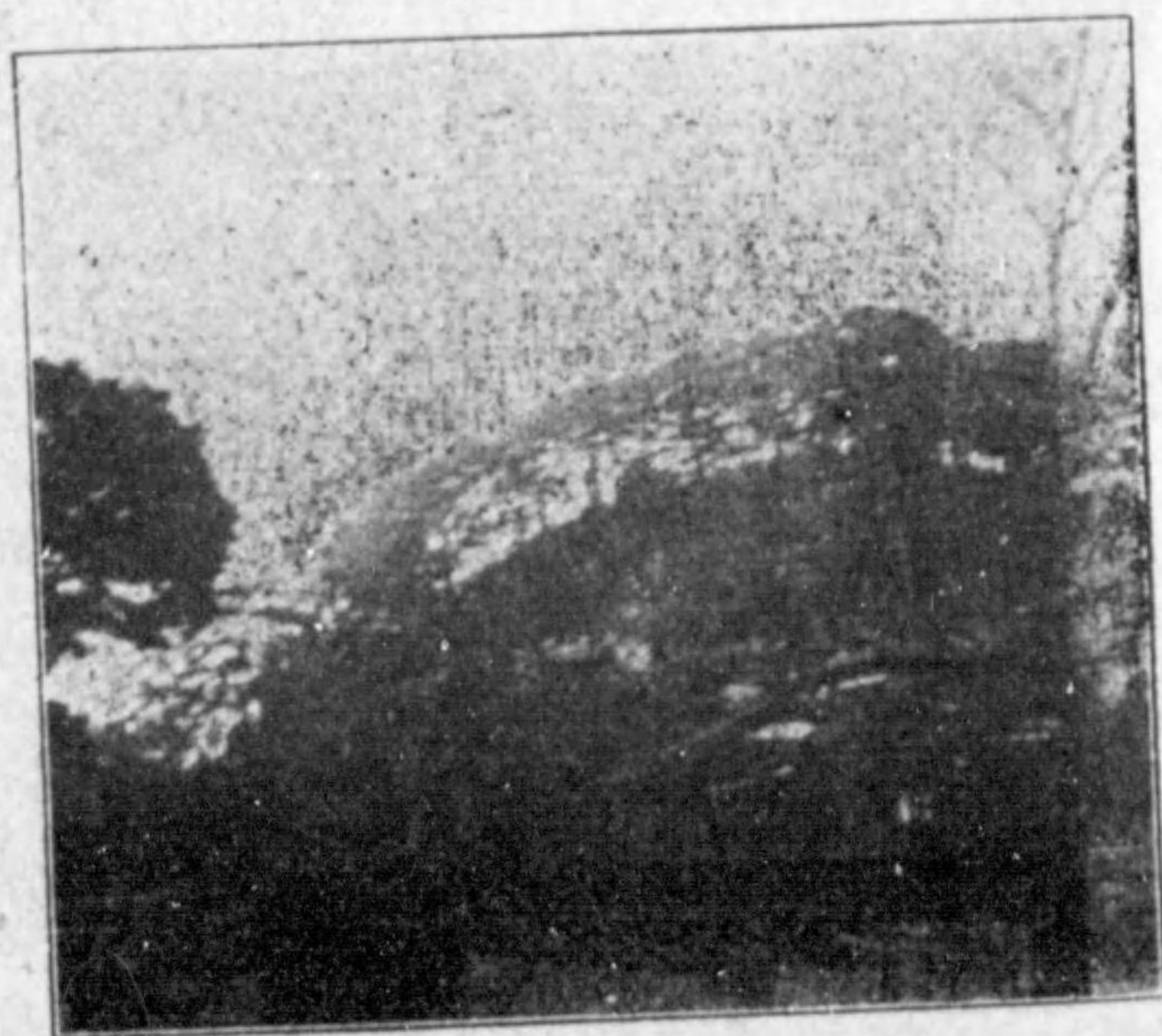
あれども、常に川に添ひて景色

よく、彼の屏風岩なども、この

道中なり、三田よりは道路平坦

にして夜路するも妨なし。こ

の街道は道場を経て、人家多し。



景色も生瀬街道のやうに幽静ならざれども、有馬富士を見やるなど快活なり。

生瀬温泉

阪鶴鐵道生瀬驛より降るれば、二丁餘にして達すべし。川に臨み崖に添ひたる處に在り。これは近時の發見なれども、旅館の宏大にして清潔なるもの少からず。有馬に遊ぶもの、朝に大阪を發し、此にて小休沐浴して登りゆくもよし。停車場に近ければ萬づ便利にして、遊客少からず。避暑には好地なり。この邊溪ふかく水早く、惟巖奇石少からず。いはゆる猿首岩鹿尻坂等あり。生瀬村より數丁にして名鹽村に出づべし。こゝには、又獨鈷

水といふあり。一に窪清水といふ。高塚清水(湯山に)筒井清水(上津畑村)と共に、有馬郡の三清水といふ。清く澄みたること鏡のごとし。

武田尾温泉

阪鶴鐵道武田尾驛より五丁餘鹽瀨村大字名鹽に在り。これは古より湧出したりしも、近來鐵道通ずるに及びて、普く世に知られ、旅館追々新築せられて、一つの大温泉場となるに至りぬ。

豊能郡

箕面山

阪鶴鐵道池田驛より五十丁

箕面山は紅葉を以て世にその名高し。山に寺院あり、龍安寺吉祥院といふ。役の小角の開基なり。京都聖護院に屬せり。本社には辨財天女を安じ、本地堂には如意輪觀音をまつる。又行者堂あり、鎮守あり、加持水あり。登り口の鳥井の右に聖天尊社あり。かくの如き靈場なるが故に、參詣人多きに、紅葉の頃全山錦綾を敷きたるがごとく遊覽の客織るがごとし。

この山の下に平尾といふ處あり。こゝまでは池田驛より馬車もあり、人力車もかよへり。これより溪流に従ひゆけば、山はやう／＼に逼りて屏風を立てたるがごとくなるに、紅葉は山上よりかけて照りかゞやけばたゞ目を射るやうなり。かくて、前に述べし、辨財天、聖天尊等の社殿の邊に至れば、山いよく深く谷ますます迫れり。

こゝには僧坊もあり、且つ紅葉の頃は、旅館もあり、又休息店あり、料理店あり、遊戯場あり是等は名産として紅葉の簪、紅葉の手巾、手拭及び紅葉の天麩羅等を賣り、風流なるしつらひし、田舎少女に裝束せさせて、客を呼ばするさまなど面白し。本社より十八丁ばかり行けば、いはゆる箕面瀧あり。高さ十六丈、巖頭より一直線に飛下するさま紅雲の中に白龍の躍るがごとし。この邊にも例の休息所あまたあり、瀧の上に三鉢の松あり、又龍穴と稱する深



淵あり。是より六丁ばかり奥にすゝめば、又飛泉あり。長さ八丈ばかり、前なるを雌瀧といひ、之を雄瀧といふとぞ。この上は座禪石、錫杖石、白龍石などあり。その絶頂の處を天上嶽といふ。役行者の古跡なり。今はこの山大阪府の公園となりたれば、風致愈々加はりて客をして歸るを忘れしむる趣あり。

仁和寺覺性法親王の歌に、
木の間より有明の月のあくらずば

ひとりや山の峯をいでまし

とあるに、その幽邃のさまを知るべし。

大澤山久安寺

細川村伏尾に在り。もと安養院と號せり。古義眞言にして、行基菩薩の開基なり。本尊は十一面觀世音なり。護摩堂、阿彌陀堂、藥師堂、御影堂、荒神社、鎮守白山權現、朱雀池、善女龍王社、辨財天社、愛宕祠、天満宮、逆川、千代橋、車瀧、小鶴庭、菩提寺等あり。保延六年の冬火災にかゝりしを、近衛院久安六年に勅して再建せしめらる。この時久安寺と改め、震書の額を賜ひたり。時の寺職賢實上人は、道高く徳廣き人なりしかば、大に世の信仰を得、寺門日々に榮えゆけり。故にこの人を當山の中興といふ。この地かくの如き靈場なるが上に、春は満山に櫻雲靡き秋は紅葉の錦風に飛で、紅の浪を揚ぐ。加之夏は安谷の螢玉を散らすかごとく、冬は小鶴庭の雪白簾をかゝるがごとしといふ。かゝれば四時

の風光を賞せんが爲に登山するもの絶ゆる時なし。本山より八丁ばかり乾の方に慈恩寺といふあり、これ即ち久安寺奥の院なり。門前に寺尾千軒といふ名ある邊は、古へこの寺の盛なりし頃、僧房千戸もありし跡といふ。前記の小鶴庭は、嘗て豊太閣の宿せられし處とぞ。名木奇石多く、庭園ことに趣あり。

猪名

古へは大物浦より今の伊丹池田邊、又東は吹田江口のあたりまで、入江にして船なども通へりといへり。古書に猪名海、猪名浦、猪名濱、猪名沖、猪名湊、猪名中道などいへるは、いづれもこの邊なり。

萬葉しなか鳥猪名の浦回をこぎくれば

讀人不知

夕霧立ぬ宿はなくして

覺 圓

夫木千鳥なく猪名の濱屋の明かたに

宮もる月の影を淋しき

隆 信

千載うさねする猪名の湊にさこゆなり

鹿の音おろす峰の松風

池田町 阪鶴鐵道池田驛

古へは吳服里といへり。本郡中にての都會なり。町は池田川の東岸に添ひたり。清酒醸造の家多く、池田酒とて世に賞味せらる。又炭をも出す。人口五千餘、大阪を距ること僅に五里なるに、且つ阪鶴鐵道線に當りたれば、日々に繁華に赴くとぞ。

吳織穴織神社

吳織は池田町の南端に、穴織は同じく北の入口にあり。共にこの地の生土神なり。池田の舊名くれはのさと、云ふはこの神社に因みたるなるべし。

史を按ずるに、應神天皇の時、阿知使主を吳に遣はして、工女を求めしめらる。使主即ち吳國に至り、工女四人を率ゐて來り、その一を筑紫胸形に置き、その三を津の國に置くと見ゆ。これ即ち吳織穴織なり。(吳織は吳の機織、穴織は漢の機織なり。)また池田のわきに唐船といふ地名あるはもと猪名川の中にて唐船の淵といひし處にて、古くは海につゞき、彼の工女等が上りし地といへり。

又染殿井といふがあるも、彼の工女が糸を染めし井にて、絹繫松といひて、この町の東北の山上にあるも同じく彼の工女が絹を染めてかけし松の、こりといへり。又町の南方の田野に吳織野といふ字あるは、もとの織殿の舊蹟と知らる。その他星御門といふも、池田町の字に残れるが、かの工女の遺跡といへり。又町の北方に梅室姫室といへるは、彼の工女等が死せし後機物織物の具を藏めたる舊蹟なりとぞ。是等を合せ考ふるに、彼の阿知使主が工女を率ゐて來りし時は、既に應神天皇崩御の後にて、仁徳天皇の今の大阪に都したまへる頃なれば、この地船つさにして、且つ水潔く、染物織物等に便よかりければ、やがて織殿を建てしめられしものと見ゆ。さてこの工女の木像は、今山城國秦勝廣隆寺に在り。

猪名川

久安寺川多田川の二水、木部村に會して流れ、池田に至りて池田川といふ。下河原北川原桑津等を経過し、田能村に至り分れて二流となり、一は椎堂富田を経て戸の内に至り、神崎川に入り、一は西に流れて藻川といふ。食満額田高田を経て神崎に入り、神崎川となる。豊島郡川邊郡の二つに跨れり、

萬葉かくのみにありけるものを猪名川の

讀人不知

おくをふかめて我おもひける

貫之

六帖千鳥なく猪名の川原を見る時は

やまと戀しくおもほゆるかな

この川初夏より秋にかけて、鮎、鯉多く、釣を垂れ、又手網にて漁するに興多し。石おもしろく水清くして魚のひれふるさまも見ゆ。

能勢妙見祠

東郷村大字野間村妙見山の峯に在り。麓より坂路十六丁、一丁毎に標石を立つ。溪流に石橋を架せり。左右に石燈籠十六基石階百三十二段あり。これは能勢藏人、妙見城の守護神といへり。(一説に摩利支天と云ふ)古くはあまり世に聞えざりしが、百二三十年以來、靈驗ありとて京都大阪は更なり、遠國よりも參詣人絶えず。厄難病苦を患ふるもの、こゝに籠り瀧(妙見宮より山下十一丁目に在り)に浴し、終日嶮坂を上下し法華の題目を唱へて祈願するもの多し。こ

の野間、地黄などいふあたり、總て能勢氏の領地たりき、清普寺といふは地黄村に在りて、能勢氏代々の菩提所なり。能勢頼幸の墓碑元龜三年九月廿六日卒と記せるあり。又同村に眞如寺といふあり。これ能勢氏の祈願所とぞ。

劔尾山月峰寺

劔尾山月峰寺は、西郷村大字大里村に在り。本尊は十一面觀音にして、聖徳太子の開基なり。この寺もとは、今の地より五十丁北なる山邊村の上方にありき。然るに天文十四年十二月二日丹波八上城主波多野與兵衛尉、この地を奪はんとて、當山に亂入し放火して灰燼とせしより、今の地に遷して下山と號せり。寛文四年に禪宗若珠和

尙、山頭退轉の地を再營して月が峯本寺を建てしといへども、天和年中に又頽廢して、この下山の月峯寺一院となれりといふ。

河内國

河内國は上古を凡河内と書きしを、元正天皇の時に凡の字を削られ、河内の二字とせられたり。大河この國の西北を繞れるが故の名といへり。

延喜の制にては、十四郡に分れたりしが、後十六郡となりぬ。明治維新後大阪府の管下となるに及び、廿九年三月の法律卅八號を以て、

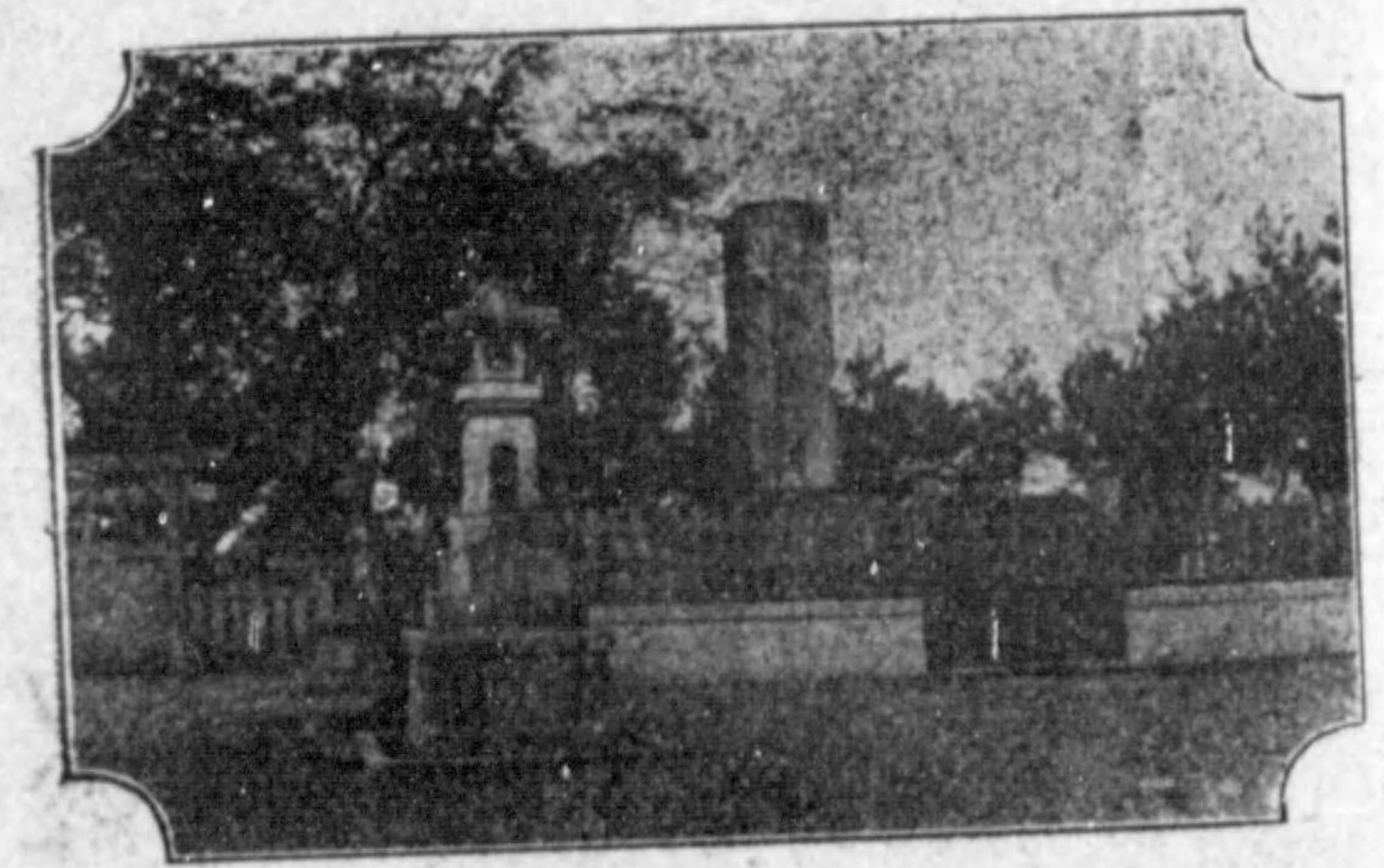
石川、錦部、八上、古市、安宿、丹南の諸郡を廢し、その區域と志紀郡を廢し、その區域の一部(道明寺、小山、柏原、太田、志紀)等を以て南河内郡を置き、丹北、大縣、高安、河内、若江及び澁川郡を廢し、その區域と志紀郡に屬せし區域の一部(三本木)とを以て中河内郡を置き、茨田、交野及び讚良郡を廢しその區域を以て、北河内郡を置かれたり。

この國東は大和に界し、西は攝津和泉と聯なり、南は紀伊に隣り、北は山城に至れり。東西五里南北十四里と云ふ。

北河内郡

楠正行の墳墓

正行朝臣の墓は、舊讚良郡甲可村大字南野即ち四條繩手に在り。四方に石垣を築き柵をめぐらしたり。その表門よりすゝみゆけば、更に壇を高く築き成したる中に碑あり記して贈從三位楠正行朝臣之墓と云ふ。これは故大久保利通の筆とぞ。その左に一段低く石柵をめぐらしたる中に、楠の大樹あり。その根のもとに南無權現と鐫りたる小石建てり。河内志によれば、これは公の戦死後何人か塚上に楠樹を植ゑてこの石を建てたるものといへ



り。
この域内には二三の碑立てり。又松櫻など數多植ゑ成され、茶所をも建てあり。春の頃は參詣人最多しとぞ。
按ずるに墳墓のかくの如く嚴に構へ成されしは、明治九年以來の事にして碑の成りしは十一年なりと云ふ。名所圖會にこの墓に正行の文字見えざるは足利氏に憚りしものなるべし、父正成の墓には、水戸黄門碑を建てさせ給ひしこと世の知る所なり、その息の忠臣を賞して碑銘を建ざるは不韻の至りなり、心あらん人は碑碣を建つべきなりと歎きたるに、今の狀に至れるは秋里翁も、いかに苔の下に悦ぶらん。
又按に舊河内郡六萬寺村往生院に正行の墓と云ふあり。それは

五輪塔なるが、その傍に正成の塔もありて、從五位上橘朝臣正成靈光寺大圓義龍大居士、於攝州、兵庫湊川戰死云々と銘せり。
正成の塔は跡より冥福のために建てしものなるべけれども、正行の墓は、その古色蒼然たる、ことにこの寺楠氏累代に縁故あれば、この方眞なるやも知るべからず。果して然らば彼の楠樹のものとの墓は、たゞ戰死の地たるにより、何人か塚を築き供養せしものか。たゞ楠氏とも正行ともかゝて、南無權現と鐫せしもの。その故にて足利氏を憚りしにはあらざるべし。その正行の首塚は京都小倉山の麓天龍寺内に在り。このいはれはその條にいへり。

四條噺神社

四條畷神社は、即ち正行朝臣を祀れり。こは彼の墳墓より一直線に東する處にて、飯盛山の麓に在り。これは明治廿二年土地の人民一同より大阪府を経て神社創立の事を願ひ出て同年別格官幣社に列せられしものなり。配祀には楠正時和田賢秀以下殉難戦歿の將士なり。この社石階數百段の上在りて、本社拜殿等の建築頗る壯嚴なり。この地最も高く、田圃を隔て、大阪市を見、遙に武庫の山嶺を望む。その眺望良きまゝに旅館料理店



(河内國) (〇五二)

等社域に隣りして建てられ、又茶店休息所等は、社内所々に構へ成されたり。又此より墳墓につゞきては小店左右に聯なり楠公に縁ある賣品多し。(例へば菊水煎餅、楠公焼等) 例祭は毎月五日にして、春は二月十二日四月五日秋は十月五日と云ふ。その中四月は花見をかねて參詣するもの多く、社内殆ど人にて埋まるといへり。社内に征清紀念碑あり就て見るべし。

和田賢秀の墓

和田新發意賢秀は(一に源秀とも書く)正行と共に此地にて討死せし人なり。その墓は正行の墓より東北一丁餘の處にあり。一廓を成しされども、吊ふ人少きにや、草生ひ延びたり。墓石は三尺ばかり

(河内國) (一五二)

にして和田源秀戦死之墓と記せり。その神靈は彼の四條暎神社に祀
られをること上に述べしがごとし。

按に和田氏は楠氏の一族なり。太平記に依るに楠兄弟此所にて
討死の後賢秀は一人賊軍に紛れ入り師直を刺さんとしたるを、賊
に降参したる湯淺某之を見知り、賢秀が後に廻はり、その膝を切
り倒るゝ所を走りよりて頸をかゝんとせり賢秀眼を怒らして湯淺
を睨みしを、湯淺遂にその頸を打取りたり。然るに湯淺はその日
より病付て身心惱亂し、常に賢秀が怒れる眼消えやらず七日めに
みづからもだえて死にきといへり。賢秀の剛膽なりしことは、こ
の一事にても知られるべし。

飯盛山

四條暎神社の上北條村の東に在り。山形傾き圓くして秀でたり。そ
の形飯を盛りたるが如くなるが故に名づくとぞ。山上に城趾あり。
建武の末に、僧正憲法が據りし所なるを正成之を攻め取りたり。正
平年間高師直此に陣し、正行と戦ひ克てり。その後畠山の家臣此に
居り、永祿年中には、三好長慶之に據れり。元龜年中遊佐信教、畠
山昭高を輔けてこゝに居り、遂に自立したりしを、織田信長之を攻
め滅したり。

この山草木森鬱、然れども道通じて、上るに甚しく困難ならず。山
上より望めば河内全體殆ど眼中に入り、猶遠く攝津の諸山を見はら

すべし。たゞに古城趾を吊ふのみならず春の蕨秋の松茸狩するもの多しといふ。

野崎觀音

福聚山慈眼寺は禪宗曹洞にして、野崎村に在り。本尊十一面觀音なり、別に藥師堂、阿彌陀堂、羅漢堂、鐘堂あり。寺説によれば、當山は南天竺波羅奈國大悲の聖蹟を摸したる古刹なりと云ふ。故に今に寺前の澤を波羅奈澤といへり。但し創立年代詳ならず。この寺彼の江口君（一條院の御宇の人）參籠して病惱全癒せしといふより、大に世の信仰を博し、四方の人々の參詣祈願するもの絶えず。（今に君堂とて本堂の奥に別にこの君を祭れるあり、縁結びの紙

など數多結び付け切髪なども捧げたるあり、その後權大僧都實慶（龜山帝の時）沙門入蓮（伏見院の時）などこの住職たりしが、永祿八年松永久秀の亂に佛宇悉く兵火にかゝれり。その後再建せるが今の堂殿なりとぞ。

野崎觀音の名は、大阪市人知らぬものなく、野崎參と云ひて、ことに春は無縁經とて、櫻の匂ふ頃、老若男女詣づるもの多し。舊幕の頃はあるは寢屋川を舟にて上り、あるは陸にてゆくことなりしが、この水陸の二群互に言葉戦ひして争ひゆくを例とせりとぞ。今は鐵道の便によるもの多くなりて古風やうく棄れたりと云ふ。石階數段上りつむれば河北全面を見わたして、景色あくことなし。

佐太天満宮

佐太天神は庭窪村大字佐太に在り、もとの京都街道なり。鳥居より中門まで馬場前一丁半ばかりあり。松の並木ありて風景よし。本社の外、好文天神、白太夫祠、及び末社あり。又後水尾院の賜はりし梅といふあり。

按にこの社、久しく荒廢したりしを、慶安の初淀城主永井尙政再建せし時、後水尾院名香に二枝の梅をそへて御寄附あり。(この時の御製、家の風世々につたへて神垣やたえたるをつく梅もにほはむ。)この梅を接木せしに忽ち生育せしが、今の勅梅といへり。爾來上下の信仰大に加はり、以て今日に及べり。

この社の後に菅相寺といふあり。正保元年の建立にして、天神の奥の院と唱へをれり。來迎寺といふも同じくこの地にあり。

枚方町

枚方は京都街道にして、維新前は繁華なる一驛なりしなり。今は町となりて戸數四百餘あり。郡役所裁判所等あり。この地古へは牧場にして、多く良馬を出し、彼の名だかき生噓もこの産なりと云ひ傳ふ。御茶屋秀吉の枚方城趾戦國時代本多あり、又牛頭天王祠三矢地下萬年寺眞言東西本願寺等あり。町の東に孤峰あるは、鷹塚山にして、昔惟喬親王の愛鷹を埋めしよりの名と云ふ。又その山の傍に藏が谷といふあるは、履仲天皇の時

建てられし官庫の跡なりとぞ。
按に中古この邊總て荒野にして官人遊獵の地たりしなるべし。こゝに禁野といふ村名あるも、いはゆる漁獵禁止の野の意にて、今の御獵場といふに同じ。又前述萬年寺の寺記に惟喬親王の鷹を死して後、彼の鷹塚山に埋めきといへるなど如何にもさる事なるべし。されば後までも廣野にてありしかば、鎌倉時代には一の大牧場にあてしなるべし。その上島下島渚など、いふ地名あるは、いづれも淀川に因みあるが故なり。舊幕時代には、この驛に監船所あり又本陣ありていと繁華なりしは、西國の諸侯の通路たりしによれり。

又按に藏が谷を履仲天皇の官庫の故蹟といへるは、年代悠久にして他に考據たるべきものなけれども、史を按に、同天皇の朝には始て藏職を建て藏部を定むと云ふことありて、後の内藏及びその官人出來たる始なれば、この地或はその處なりしも知るべからず。

石船巖

石船巖は舊交野郡私市村の東方二十丁餘の處にあり、これは大和へ通ふ路にて俗に岩船越といふ。この邊山深く巖石秀て水流渦まきてすさまじし。石船巖はこの峽中に横はりて、形船のごとし。高さ二丈餘、長さ五丈ばかり也、その傍に岩彫佛とて巖に佛像四軀を鐫れる

あり。土人は之を住吉明神といへり。古は大和南田原村石船明神の神輿こゝに臨幸ありきとぞ。之より二丁ばかり西の方に鮎返瀧あり。暑中の散歩には最も適せり。

星田妙見祠

妙見神祠は、星田村の東妙見山に在り。神躰は大なる巖石にしてその數三つ、鼎のごとくに相峙てり。石階數段、石の鳥居拜殿玉垣等あり、土人は之を妙見石とも織女石ともいへり。こゝに明星水といふあり、靈泉にして清きこと玉のごとし。暑中の參詣には最も妙なり。

普見山獅子窟寺

獅子窟寺は私市村の山峯八丁の處に在り。本尊藥師又頻頭盧を安ず。昔より祈雨に靈驗ありと云ふ。本堂より坂路一丁ばかり北に龜山院あり。龜山院は山城龜山にて火葬し奉り、御骨は淨金剛院南禪寺及び金剛寺の三所に收めし由なれば、こゝなるは嘗て御駐駕ありしに因みて御報恩の爲に陵を築きしが、その陵側に同院皇后の御墓もあるも同じ趣なるべしと名所圖會に云へり。

この山木ふかく岩わだかまつてさながら獅子の踞るに似たるにより獅子窟山とは名づけたり。溪水の音松風に和し夏といへども暑をわするといふ役行者之を發見し、行基菩薩勸願を蒙りて堂宇を建立せ

りとぞ。

開元寺瀧

土人はこの瀧を元寺の瀧といふ。倉治村の東五丁許に在り。故に一に倉治の瀧ともいふ。瀧の長さ五丈。傍に不動石及び不動堂あり。瘋癲及び眼病の者此に浴すれば靈應ありとぞ。昔は開元寺といふ梵刹ありて瀧はその域内なりきといふ。

百濟王仁の墓

博士仁王は河内文首の始祖にして、此の地にて死したり。墓は菅原村大字藤坂の東北御墓谷にあり。柵の中に石標をたて、王仁之墓と

記せり。仁王の我が文化に功ありしことは今更にいふを要せし。近來この墓修覆擴張の計畫あり。

交野の原

今の交野村あたりの總名にして王朝時代の御獵場なりしなり。禁野、中宮、片鋒など、皆この中なり。交野の狩の事は古書に數多見えて一々引出づる要もなかるべし。鳥立原などいふも獵野なりし故の名なり。天の川といふもこの原を流れて淀川に入るものにして、昔よりその名見えたり。伊勢物語に、狩りくらししたなばたつめに宿からん

天の河原に我は來にけり

といへるは即ちこの地の事なり。

郊祀壇の趾

我が國にて神を祭るには必ずそれ々の社又は清淨の地に神籬を立てそれ々の神をさし奉りて禮をつくすが古風なりしなり。然るに支那の昊文上帝を祀る風段々移り來て我も之に倣ふ事となりぬ。桓武天皇延暦四年交野の柏原にて天神を祭り、又同六年にも同じくこの祭を行ひ、又文徳天皇齊衡三年にも、同地に於て昊文上帝を祀られし事など見ゆる即ち是なり。名所圖會によれば、今交野の一本杉といふ（杉村に在り）は則この郊祀壇の廢蹟といへり。按にこの昊文上帝を郊祀せられしことは全く一時の事にて、支那崇敬熱去り

ては、又古儀に復せり。

渚院の趾

渚院の故跡は、渚村に在り。昔惟喬親王屢々此地に遊獵し遂に頓宮を建てられし跡なり。今は寺となりて觀音堂をすゑたり。駒止松とて同親王の駒を繋かれし松の木残り。寛文の頃杉井古通の建てし碑あり。この院の當時の狀は、伊勢物語に見えて、世人の洽く知る處なり。彼の業平が「世の中にたえてさくらのなかりせは春のころはのどけからまし」とよみしは此にての事なり。

中河内郡

枚岡神社

枚岡神社は官幣大社にして、舊河内郡出雲井村に在り。天兒屋命及び比賣神を祭る。孝徳天皇白雉元年に創立せられたり。光仁天皇寶龜九年に至りて、春日にて祭らるゝ鹿島香取の二神を配祀してより四座となれり。(大和の春日社の天兒屋命はこの社の御分靈なり。)かゝれば春日と同御祭神たるによりその祭儀も一にそれに準せられ、毎年二月十一月上申日を以て祭を行ふ。後河内の一の宮として崇敬するに至れり。

一の鳥居は京街道にして、本社より六丁ばかり西に在り。是を入りて右方に社務所あり、夫より石階を上りゆけば、本社に出づ。杉の

大木晝猶暗さまでに生ひ茂れり。社内に御手洗あり、清きこと鏡のごとし。南方に若宮あり、天押雲命をまつる。又末社及び猿田彦祠等あり。社地に添ひて、梅林あり、花の頃は休息店茶舗等もしつらひて賑合へり。一の鳥居内の櫻花も年ふりて、咲の盛りは見はやす人絶えず。

瓢箪山稻荷

瓢箪山稻荷社は、高野街道の東枝岡村大字四條の丘上に在り。近來信仰者日に増し、大阪京都邊より參詣人絶えず。

石切劍箭神社

石切劍箭神社は、神並村に在り。祭神詳ならず、貞觀七年に正六位上より從五位下に降られたること見ゆ。延喜の制にては小社に列せられたり。神並、芝、植付、額田、日下等五ヶ村の産生神と云ふ。本社は切疵腫物等に特別の靈驗ありとて、その災に罹る者參詣絶えず、神官はその祈禱に信を凝らして神符を出す。凡そ大阪市民を初め、近郷の者にして、この神社を知らざるものもなく、日々歩を神前に運ぶもの數ふべからず。爲に鳥居前には料理店休息所等の設もありて、頗る繁盛せり。

草香山

草香山は生駒山のつゞきなり。この地神武天皇紀に見えたる處にし

て、天皇は是より漸く大和に討入たまひしなり。彼の長髓彦が天皇の軍を孔舍衛坂に激へ撃つとある衛は契沖の説の如く衛の誤にて、此山に添ひたる地なるべし。又青雲の白肩の津といへるも、この山下の草香村にして、大阪より船にて遡りこゝに上陸したまひしなり。萬葉集に「おしける難波を過て、打なびく草香の山を、夕ぐれに、吾こえくれば、山もせに、さけるつゞじの、にくからぬ君をいっしか、ゆきてはや見む」讀人不知といへるは即ちこの山なり。

草香江

草香江は川よりつゞきて入江ありしよりの名か、或はこゝには上古大なる池ありしよりの名にや、日本紀に垂仁天皇三十五年九月皇子

五十瓊敷命を河内國に遣して、高石池茅渟池を作らしめたまふとあるはこの地なり。今に天子池、御所池來照池などいふあり。雄略天皇の朝赤猪子といふ老女か歌に「草香江の入江の蓮はなはちすみのさかり人ともしきろかも」といひ、又萬葉集大伴旅人「草香江の入江にあさるあしたつのあなたづくし友なしにして」などあるを思ひ合せて當時の状を知るべし。

大龍禪寺

瑞雲山大龍禪寺は、草香村にあり。禪宗黃檗派なり。開基詳ならず、中興黃檗派惠極和尚二代泰宗和尚實永年中の建立と云ふ。名所佛殿禪悅堂選佛場開山堂等あり。一枚石の橋をわたり表門より進み

ゆけば、寺内閑静いふべからず。奥の山に瀧あり。巖迫まり松翠深うして幽邃極まれり。

長尾瀧及不動寺

長尾瀧は長尾山にあり。里より廿丁許の山奥なり。瀧は雄雌二泉なり。雄瀧は高さ四丈ばかり左右に巨巖怪石あり一直線に落ちてその勢あそろし。雌瀧は高さ二丈ばかり岩面を傳ひ滑かに落つ、近衛龍山嘗て此に來られし時のうたに云く、

たつねすはありともこゝに山鳥の

長尾のおくのたきの白いと

この瀧の上に雙龍庵といふあり。

不動寺は即ち不動尊を安置せるものにて、この瀧の傍に在り。眞言宗にして平石高貴寺に屬す。寺内に石碑ありて、近衛龍山登山の事を鐫れり。高貴寺慈雲比丘の筆なり。

雄略天皇御陵

雄略天皇の御陵は、丹比高鷲原陵と號す、高鷲村大字島泉に在り。史を按ずるに、天皇御宇廿三年八月天皇疾彌甚與二百寮辭訣、握レ手歎歎、崩レ于ニ大殿ニとあり。

來目皇子の墳

來目皇子の墳は川上村大字埴生野新田に在り。皇子は用明天皇の皇

子にして聖德太子の弟なり。征新羅大將軍として、筑紫におはしたりしに、彼地にて薨ぜられしかば、そこに殯殮し後この處に葬られしなり。事は日本紀推古天皇十一年紀に詳なり。

柴籬宮趾

柴籬宮は反正天皇の都なり。史を按ずるに、天皇元年冬十月都於河内丹比ニ是謂ニ柴籬宮とある是なり。名所圖會に今の松原村上田廣庭神祠の東北をいふと云々。廣庭神祠は、今天滿宮と稱せり。

棕樹山大聖勝軍寺

大聖勝軍寺は、太子堂村に在り、里俗下の太子といふ。(これ上の太

子に對せる稱なり。本尊は聖德太子植髮の御影にして、十六歳の尊容御自作と云ふ。この地彼の守屋大連と戦ひて、勝を獲られし處なりしが故に、大聖勝軍寺と號せしなるべし。棕樹山とは大なる棕木ありて、太子この蔭にかくれて遂に守屋に勝ちたまひし故とぞ。今に神妙棕とて本堂の前に在るはその裔なりと云ふ。慶長以前までは、伽藍等も今より頗る宏大なりきといへり。守屋大連の墳及其の頸濯池などいふもの、この寺の門前に在り。

物部守屋の墓

物部大連守屋の墓は、勝軍寺の東一丁餘の處にあり。碑あり物部守屋大連墳といふ。これは舊堺縣令小河一敏の建てしものとぞ。

近松山顯證寺

顯證寺は久寶寺村に在り。本尊阿彌陀佛にして、本願寺蓮如上人の建立なり。久寶寺御坊と稱す。蓮如松含月亭等あり。

由義宮跡

由義宮とは、孝謙天皇の時に此地に置かれしものなり。續日本紀に神護景雲三年十月、帝由義宮に幸し詔して西京と爲し、又河内國を河内職となし、(職とは國司より一等重きものにて即京師に准せられしなり) 高年七十已上の者に物を賜ひ、安宿志紀二郡田租の半を免すとある是なり。同朝には屢々此に行幸あり。風流なる御遊な

ども行はれしことなり。今の別宮、都塚、弓削、植松等の地は蓋しこの故趾ならんと河内誌にいへり。弓削行宮は、東弓削村にして、弓削道鏡が太政大臣禪師に拜し、文武百官の拜賀を受しは、實にこの處なり。弓削神社もこゝにあつて當村の産土神たり。こは延喜式内の神社にして、貞觀元年に正五位を授け同二年に従二位を加へられたるこゝと三代實録に見ゆ。古は弓削寺もこゝに在りし趣なれども今はなし。

初日山常光寺

常光寺は八尾西郷村に在り。當山は行基菩薩の開基にして、本尊は

地藏菩薩なり。白河法皇嘗て龍駕を駐めさせられし事あり。又足利義滿の參詣せしこともあり。かく公武の崇敬大方ならず伽藍もいかめしかりしを、慶長元和の役に、この邊戰場となりて、荒廢に歸せしもの多し、尙方丈の庭に戦死碑あり。寶曆十四年に元和の役に死せし藤堂家の諸士七十一人のために建てしものなり。

八尾御堂大信寺

大信寺は八尾寺内にあり。本願寺十二代教如上人慶長年中の建立なり。本尊阿彌陀佛なり。京都東本願寺門跡の連枝代々寺職とならるゝ例なるが故に、八尾の御堂といふ。寺傍に八尾天満宮あり。片桐勝元の建立といふ。

若江鏡神社

鏡神社は若江村に在り。延喜式に出づ。

按に三代實錄に美濃國に各務氏あり。各務の郡領たり。各務と鏡と音訓相通ず。本社は若しその族にして、この地に居りその祖を祭りしものか。大日本神祇誌

木村重成の墓

木村長門守重成は、豊臣秀次の臣木村常陸介の子なり。元和の役廿五歳にて此にて討死せり。墓には松樹あり、石碑あり。表に記して長門守木村重成之墓とあり。上若江西郡村にあり。

山口重信の墓

伊豆守山口重信は、父重政と共に、井伊氏の軍に従つて、この地に攻め來り、木村重成と相組んで戦死せり。年二十六。後弟但馬弘隆墳墓を築き石碑を立てたり。撰文は林羅山なり。重成の墓と相去ること十五間ばかり。世に之を忠臣名賢の墓といふ。

南河内郡

柏原町

柏原は關西鐵道、奈良鐵道及び河陽鐵道等諸線の複線する處にし

て、近年殊に賑合へり。戸數も日を逐ひて増加し、田畝もかづく埋まりて、人家になりゆくさまなり。料理及び旅館は、疊屋を初として數軒あり。本郡の諸勝地を見めぐるに便なるは更なり、奈良に赴き、又た京阪に向はんにも最も便利なり。

當宗神社

當宗神社は譽田の北水町當宗垣内に在り。當宗氏は宇多天皇の御外祖母なるに依て祭られたり。三代實錄に寛平五年四月七日始て河内國志紀郡當宗神祭に幣帛使を遣はす、國司一人その事を專當す、並に國の正税を用ひ、永く恒例と爲すとある是なり。延喜式内の神社にして世々崇敬嚴かなり。

按に當宗氏は蕃別にして、忌寸姓なり。姓氏錄に依るに、後漢獻帝四世孫山陽公の後より出てたり。

道明尼寺天滿宮 河陽鐵道道明寺驛

道明尼寺は道明寺村土師に在り。この地菅原道真公の祖、野原宿禰の子孫土師氏の領地たりしが、聖德太子尼寺をこゝに建てたまふ時、土師八島連といふものその家を捨て、寺に宛てたり。即ち仍て土師寺といひしを後に道明尼寺と改めたり。その後菅原是善卿の妹覺壽（即ち道真公の姨）祖先以來の氏寺たるにより此の住職となられしかば、道真公その縁故にて屢々この寺に來られしなり。彼の九州左遷の時姨君に名殘を惜まんとて殊にこゝに來り一夜を明かせり

といふ。

按に寺説にこの時御話盡させざりしに、鶏なきて天明ければ道
眞公なけばこそ別れもうけれ鳥のねのなからんさとの曉もがな
と詠せられたり、夫より今に至るまで里人鶏を畜ふことを思む
と云ふ。

かゝる縁故に依りて、京師北野に天満宮を祭られし時、此にも寺の
中方三町を下して社壇を營まれしが、今の天満宮なり。元龜年中古
市高屋城の兵亂に、この地一たびは灰燼となりしを、天正年中に再
興あり。ことにこの頃にて菅公一千年祭につき、社壇修復成りて、
壯麗目を奪へり。樓門の前に料理休憩店等あり、參詣人に便する
少からず。

諸堂末社等多き中に、天穗日命社あり。これ土師氏即ち菅原氏の
祖神なり。又本社より一丁ばかり坤の方に當りて、三社神詞あり。
天照太神、八幡、その後木櫛樹あり。この實を念珠となし人々重寶す。
宮、春日明神、世に道明寺と稱する糶あるは、この寺坊にて製出せしよりの名なり。
この糶の歡迎せられることは、吾人の知る所なるが、廿七八年の
征清役に於ては、大に我が軍糧を助けしと云ふ。

允恭天皇御陵

允恭天皇の御陵は、惠我長野北陵と號す、道明寺村大字國府に在り。
史を按ずるに、天皇四十二年冬十月葬ニ天皇於河内長野原陵ことある
是なり。

仲姫命御陵

仲姫命の御陵は、仲津山陵と號す、道明寺村大字澤田に在り。仲姫命は、應神天皇の皇后なり。

玉手山安福寺 道明寺停車場より八丁

玉手山安福寺は、淨土宗鎮西派にして、京都知恩寺に屬せり。常行念佛を修す。當山には古へ寺ありしも久しく荒れ果てたりしを、寛文の頃珂憶和尚といふ人、此に來り新に淨土宗の精舎を營めり。時に尾州侯光友この和尚に歸依せられしかば、堂宇最も莊嚴に建立せられたり。この山風色よく、その國見丘と稱する所より見わたせ

ば、難波の萬戸は更なり、四天王寺住吉より須磨明石の方まで遙々と眺めやらる。

本堂本尊は阿彌陀佛を安置す。外に行者堂、開山堂等あり、又奥に光友卿の廟あり。玉手山は寺の境内及び東の山をいふ。頂に靈泉あり。初秋の頃は、この山に松茸多く生じければ茸狩の人絶えずと云ふ。

葛井寺 道明寺停車場より十八丁

葛井寺は紫雲山葛井寺三寶院と云ふ。本尊千手觀音なり。寺記によると、この寺は聖武帝の勅願にて、行基菩薩開眼供養を行ひ、後平城帝の御願にて、阿保親王精舎を再造し、在原業平奥院を造立せ

しなど、頗る莊嚴なりしが明應年中兵火にかゝりて樓門中門三重大塔鎮守并に彼の奥院も焼亡したり。その後再び永正年間大地震にて一寺滅び、たゞ本尊のみ無事なりきと云ふ。かゝれば今あるはその後に建立せしものなり。

この寺には、後醍醐天皇繪旨以下南北朝時代の文書類を藏すること少からず。

按にこの地正平二年八月楠正行と細川顯氏と戦ひしところなり。時に細川は三千騎を率て京都より攻め來りしも、楠は七百餘騎の精兵を以て、散々に之を追ひ散らしたり。事の狀を太平記に叙して云く。細川陸奥守顯氏を大將として云々都合三千餘騎河内國へ差下さる。此勢八月十四日午剋に葛井寺にぞ着たりける、此

陣より楠が館へは七里を隔てたれば、縦令急に寄するとも、明日か明後日の間にぞよせんずらんと京勢油斷して或は物具を解いて休息し、或は馬鞍を下して休る所に、譽田八幡宮の後なる山陰に菊水の旗一流ほの見えて、ひた甲の兵七百餘騎閑々と馬を歩ませてうち寄せたり、スハヤ敵の寄せたるは、馬に鞍おけ物具せよとひしめき色めくところへ、正行眞先に進んで、喚いてかけ入る、大將細川陸奥守鎧をば肩にかけたれども、未だ上帯をもべめ得ず、太刀を帶くべき隙もなく見えける間、云々(中略)楠勢勝に乗じて追懸しかば、大將天王寺渡邊にて危く見えければ、六角判官舍弟六郎左衛門返し合て討れにけり、云々大將も士卒も危命を助つて皆京へぞ歸り上りにける云々、

仲哀天皇御陵

仲哀天皇の御陵は、惠我長野西陵と號す、葛井村(今は藤井とかく)大字岡に在り。史を按ずるに、天皇九年春二月天皇忽有痛身一明日崩、時年五十二、云々神功皇后紀二年十一月、葬天皇於河内國長野陵とある是なり。

仁賢天皇御陵

仁賢天皇の御陵は埴生坂本陵と號す、藤井村大字野中に在り。史を按ずるに、天皇十一年秋八月、天皇崩正寢冬十月葬埴生坂本陵とある是なり。

狭山池

狭山池は狭山にあるが故に名づく。舊錦部郡、天野小山田の二溪此に流れて池となる。周廻一里半濶さ十五萬三千五百坪流下五十三ヶ村の田園に潤ふ。狭山村新町の郷民にこの池を守らしめて租税を免す。名所

按に日本紀崇神天皇六十二年七月の詔に農は天下の大本なり、民の恃て生る所以なり、今河内國狭山埴田水少し、是を以て其國の百姓農事を怠る、其れ多く池溝を開いて、以て民業を寛くせよとあるは、即ちこの池の穿たれし始なるべし。又續紀天平寶字六年にこの池の堤決せしかば、單功八萬三千人を以て修造せしめら

れしこと見ゆ。後永祿年中に安見美濃守重ねて修造し、又慶長年間片桐勝元修補せしことなどあり。この池は實に河内國第一等の大池なり。

譽田八幡宮 古市驛より四丁

譽田八幡宮は、古市村譽田に在り。里俗ホムダといはずしてコンダといふ。應神天皇を祭る。神佛混交の時には、僧院十五宇修家十三宇ありさといへども、今はさる事なし。社内廣く、末社幣殿拜殿等あり。此の社曆朝の崇敬、又武家の信仰淺からず、神寶などにも代々の武將の寄進せしもの少からず。春の檀輦、秋の放生會祭、古へより賑合へり。

應神天皇御陵

應神天皇の御陵は、惠我漢伏崗陵と號す、古市村大字譽田に在り。(譽田の地名は天皇の御名を譽田と申し、より起れり。)史を按ずるに、天皇四十一年春二月甲午朔戊申天皇崩于明宮二時年一百十二歳(一云崩于大隅宮)とあり。こゝに葬り奉れるは御遺詔による事にして、御父仲哀天皇の御陵の附近の地なればなるべし。この御陵は、當國中最も宏大にして、古松生ひ茂り、廻りの池には雁鴨等群れ遊べり陪塚あり。

惠我市舊蹟

惠我市は顯宗天皇紀に見ゆ。今の石川は舊石川郡より流れ古市に至りて惠我川といへり。市の蹟はこの川の西、古市村の北の地とぞ。八雲御抄に惠爾我市と記せる是なり。

安閑天皇御陵

安閑天皇の御陵は、古市高屋丘陵と號す、古市村古市に在り。史を按ずるに、天皇二年冬十二月天皇崩于勾金橋宮。時年七十、是月葬天皇于河内舊市高屋丘陵。以皇后春日山田皇女及、天皇妹神前皇女一合葬于是陵とあり。合葬とは申せども、皇后の御陵は帝陵の南にありて、古市高屋陵と稱せり。皇后は仁賢天皇の皇女なり。

清寧天皇御陵

清寧天皇の御陵は、河内坂門原陵と號す、西浦村西浦に在り。史を按ずるに天皇五年春正月天皇崩冬十一月葬于河内坂門原陵とある是なり。

日本武尊御陵

日本武尊の御陵は、白鳥陵と號す、古市村大字輕墓に在り。尊の陵は伊勢の能褒野にもあり。史を按ずるに尊の陵は能褒野を第一として大和琴彈原を第二とし、こゝを第三とす。委しくは能褒陵の條に云ふべし。

駒ヶ谷金剛輪寺

駒ヶ谷は谷市より東八丁ばかりの處なり。この山中に安養院と號せ
るあるが、即ち金剛輪寺なり。本尊釋迦佛、又楠正成念持佛とせ
し十一面觀音あり。金剛輪寺とは、後村上天皇の名づけたまひしも
のとぞ。境内は楠正成供養塔あり。これは湊川戰死の後中院過ぎ
て建てしものにて、和田正遠の安養院方丈へあて、この事を依囑せ
し文書あり。又寺前に藤原永手の墓といふあり。清少納言の墳とい
ふもあるはいかゞのものにか。

この寺の上方に杜本神社あり。延喜式内の神なり。蓋し志紀村の當
宗神社と同神なるべし。大日本史三代實錄、公事根元等にも見えたり。
神祇志

大黒寺 古市驛より十丁

大黒寺は大黒村に在り。仍て里人はおくろの大黒と云ふ。この寺は
天童山と稱して、禪宗曹洞なり。本尊大黒天は役行者の作と云ふ。
長さ六寸ばかりにして腹内に安置すとぞ。信仰者寄附金の高を石碑
にして並べ立てたるもの頗る多し。遠く石川を臨んで眺望佳なり。

壺井八幡宮 紀志驛より二十丁

壺井八幡宮は、壺井村に在り。本社には應神天皇及び仲哀天皇神功
皇后を祭り、別に源賴信、源賴義、源賴家を祭れり。(維新前は
此の方を壺井權現と稱せり。)この地はもと賴信賴義等河内守たりし

時の館舎なるが、彼の奥州征伐に際して、石清水八幡宮をこゝに勸請したるが、今の社の始なり。さればその神像は義家の作にして、鶴が岡八幡の神像と同時の作といへり、社神前石階の下に壺井あり。これは彼の東征の時官軍水なくして困苦せしに頼義伊勢石清水を祈りて弭彌にて巖間を突きしかば、清泉迸出し、爲に一軍渴を癒し大勝を得たり。吉例なればとて凱旋の時その水を壺に入れて、持ち來りこゝに井を堀り移されしよりこの名ありといふ。一間四方ばかりの井にして石にて疊みたるに、佛像を彫刻せり。武家の世にて、將軍家に男子誕生あれば産湯の水はこゝより汲みきとぞ。かゝる由緒ある社なれば、徳川氏の時は社領五千石を與へられしが維新後之を奉還してより、やゝ荒廢せり。この社繪旨、武器、神像

等の寶物少からず。

石丸山通法寺

通法寺は壺井の隣村通法寺村に在り。本は眞言新義にて佛殿數多ありしが、今は廢寺となりて、その鎮守たりし三社(天照大神、八幡、春日)のみ残り。この境内に頼義の廟あり。軒傾き壁壞れて殆と狐狸の巢窟とならんとす。



そもくこの地は壺井八幡と同じく、河内守頼信の館舎たり、頼義もその跡を承けて此に住みしが、長久四年に感得することありて、その境内に一の精舎を建てしが、即ち通法寺なり。彼の義家をはじめ賀茂二郎新羅三郎など孰れもこゝにて出生せり。この寺平相國の世盛りの頃一たびはちとろへしを、徳川氏五代將軍之を再興したり。然るに維新後また荒廢して今は見るかげもなさに至れり。

頼信及び義家の墳

この通法寺より巽の方二丁ばかり細道を行き小丘に上れば、頼信の墓あり。夫より半丁ばかりして義家の墓あり。維新前まではこの寺より守る人もありて尊嚴に敬はれたりしも、今は寺と共に荒れはて

石柵も倒れ、上り拜せん道もなし、奥州の前九後三の役の大功より思ひ、廻らさば、かくてあるべきにあらぬに、さても歎かはしき事なり。況や清和源氏の子孫と名乗つて、今日堂々たる門戸を張り居るものあるにあらずや。

磯長山叡福寺聖靈院

叡福寺は即ち上の太子なり。太子村に在り。これ聖徳太子の墳墓の在る處なり。寺には金堂、多寶塔、聖靈院、上御殿、淨土堂、大師堂等數多あり。太子の墓は御墓山と稱して、上段の地にありて南向なり。こゝには太子のみならず、御母穴穂部間人皇后、御妃膳臣の女等の御墓あり、故に三骨一廟といふ。この御墓の廻りに結界石と

て、昔弘法大師觀音の梵字を鐫し總て四百九十八體建てられたり。然るに年代を歴てやうく朽缺しければ、享保年中四方有志者の寄附にて、同じく石刻に淨土の三部を鐫し、又廻りの外側に三尺餘の界石を建てたり。これには一々寄附者の名も彫りあり。この御墓山の上梓の大樹あるを大乘木と云ふ。これは間人皇后御埋葬の時、太子その御車の轅を取て、こゝにさし、我が説かん大乘の法、國土に廣からばこの木生ひ茂れと誓はれしものとぞ。故に之を靈木として尊敬せり。そもこの御墓は、太子いまだ二十七歳の御時この地を靈地と定めて、築かせたまひしものにて、彼の「こゝを切れ、かしこをたて、子孫あらせじとおもふなり」と宣ひし所なり。瑪瑙碑及び忠禪上人の墓は、御墓に向つて左に、二十句の碑文は同じく

右に在り。五字が嶺といふは、こゝの山上にて、塔婆あり。鎮守に九社權現、荒神社あり。この寺今頌徳會にて、改築の計畫あり。この事成就する時は、待賓館なども新建せらると云ふ。

用明天皇御陵

用明天皇の御陵は、河内磯長原陵と號す、磯長村大字春日に在り。即ち太子の墓より東にあたりり。(用明天皇は太子の御父帝なり。)

孝徳天皇御陵

孝徳天皇の御陵は、大阪磯長の陵と號す、山田村大字山田に在り。

太子の御墓の良に當れり。

推古天皇御陵

推古天皇の御陵は、磯長山田陵と號す、山田村大字山田に在り。太子の御墓より巽に當れり。

敏達天皇御陵

敏達天皇の御陵は、河内磯長中尾陵と號す。磯長村大字太子に在り。太子の御墓より坤に當れり。この域内に石姫皇后の墓あり。欽明帝の皇后なり。以上太子の御墓を中心として、之を梅花五陵と稱す。相距ること各

五六丁より七八丁に及べり。

神下山高貴寺

富田林驛より一里

高貴寺は白木村大字平石にあり。役行者の草創にして、初は香華寺といひたり。後弘法大師此に來り、高貴徳王菩薩の像を刻んで安置せしより、高貴寺と改めしとぞ。後鳥羽上皇熊野行幸の次龍駕を駐めたまひし事あり。金堂、講堂、後鳥羽院塔、鳥羽範俊僧正塔、大師堂、寶藏院、多門院、戒壇塔等あり。鎮守は磐船明神なり。宗旨は眞言律にして、門前に大界外相の標石を建てたり。當山に五彩の楓樹あり、晩秋の頃は賞翫の客たえず。又佛法僧鳥住むといふ。

平石城趾

平石城趾は平石村に在り。これは河内守橘茂吉の據りし處なり。元弘の役茂吉の裔茂直南朝に従ふ。笠置陥りて後正成の兵一たび此城に據り、賊の鋒を挫きしも、衆寡敵せず、城陥り、遂に金剛山に入り、茂直は此にて自殺せしと云ふ。平石太平記によるに、今川上總守、佐々木六角判官など、此に攻めよせて遂に落しけるよし見たり。兎も角も南朝方の一方の防禦となりしこと疑ふべからず。菅原長親の碑文には、後醍醐天皇護良親王も、此城に據られし赴に記せり。平石の子孫は幕府の頃は、十四萬千七百石を領せりとぞ。この村中に戦死塚といふあり。(又名念佛山)又平石累代の墓もあり。

又南照殿とて後村上院の古跡もありと云ふ。

富田林

富田林は、南河内第一等の繁華の市街なり。昔は富田芝とて廣野なりしが、天正年中公命によりて、市街を開きたりといふ。今は郡役所、警察署、郵便電信局、裁判所、中學校等あり。石川に添ひて地最、好く、金剛葛城を見やりて風景よろし。人口凡三千に達し旅宿は酒井旅館當市に冠たり。造酒屋多く、又葡萄は昔よりの名産なり。河陽鐵道の停車場當地に開かれて以來ことに繁盛を増せりと云ふ。こゝに興正寺あり。應永年中の建立にて、京都興正寺の輪番所とぞ。驛に楠氏遺跡里程標と記せる石碑あり云く。

千早城趾

三里三十二丁

水分社並に楠公遺物陳列場

一里二十八丁

赤坂村楠公誕生地

一里二十五丁

赤坂城趾

一里二十五丁

観心寺楠公首塚

三里九丁

駒ヶ谷楠家墓地

二里一丁

天野山金剛寺

三里十九丁

牛頭山龍泉寺醫王院

醫王院は、龍泉寺村にあり。推古天皇の時草創せられしを、弘仁年中弘法大師更に大伽藍をおこしぬ。この時中納言藤原冬緒を奉行と

し勅願寺としたまへり。本尊は薬師佛にして、聖徳太子御作と云ひ傳ふ。

この山上に龍泉山城の趾あり方四丁ばかりなり。この城は和田楠氏等の據れる所にして、南方の要害たりき。この状は太平記にも見えたり。

建水分神社

水分神社は、水分村に在り。近村の産土神なり。社は山に添ひて石段數十階の上に在り。この社を上水分社といふ、下水分社に對せる稱なり。境内の松樹など古びて雅致あり。本社階下左方に楠氏祠あり。後醍醐帝の勅によりて正成の靈を祭るといふ。扉の銘は武州

下館城主石川總茂侯の筆なり。
 又本社の額は水分大明神と記し、その背面に、延元二年丁丑四月廿七日勅授位記五年庚辰四月八日左衛門少尉楠正行書とあり。これこの社は楠氏等の産土神なればなり。

楠正成誕生地

正成の誕生地は、水分村の領内山の井といふ所に在り。水分神



(國內河) (八〇三)

社より戌亥の方二丁許、田圃の中なり。方凡三間四方ばかり中央に石垣を築き自然石の碑を立て、楠公誕生地と記せり。この邊即楠氏邸宅の跡なり。こゝより二三丁にして楠公の井といふあり。今は二三の百姓家の裏竹藪の中に在り。水清くすめり。この邊全躰下赤坂村にて、楠氏一族の根據地なり。

赤坂城趾

赤坂は上下に分たれたり。上赤坂は水分の上、金剛山の半腹に在り。下赤坂は東條川の西岸森屋村の東南に在り。城趾今猶殘れり。

本不見山

本不見山は東坂村にあり。森屋村より三十八丁上方なり。樹木鬱蒼としてその形圓し。これは一夜の中に湧出せしといひ傳へたり。牛頭天王八將神の祠あり。連峯の中に是のみは殊にきは立ちて見ゆ。

千早城趾

千早城趾は、千早村の上方十丁ばかり金剛山の半腹にあり。城の入口に楠氏紀勝會あり二本の石標を立て、彼の舜水が所謂、審強弱之勢於機先、決成敗之機於呼吸湊川石の句を彫りたり。この城四面の溪深きこと、東は百丈西は七十五丈南は八十丈北は三十丈ありといへり。本丸の跡には古松二三株ありて小祠宇あり。その他所々の櫓どもの趾さだかに残り。そもく赤坂よりこゝまでは、東條

川に添ひて上る道なるが、山の重なること屏風のごとく愈々奥まり愈々迫りて金剛山に達す。その嶮岨なること一夫衝に當らば實に萬夫も抗しかたかるべくぞ見ゆる。正成のこの天險に據りたるは、兼てより深く慮れる處にして、關東百萬の軍勢を此にてとりひしがんとてその期せし所とぞ。

千早村は百五十戸ばかりなれども、富者多し。山林に従事するもの多きが故とぞ。名産は高屋豆腐なり。又つくばねといふ菓物あり。旅宿は橋館といへる一つあるのみ。大和五條街道なれば、行客も少からず。

金剛山

金剛山は實に當國の名山なり。大和に跨れり。海拔四千尺。登山するには森屋より百四十丁早村より二十八丁なり。山頂に轉法輪寺。寂上乘院といふ眞言の寺あり。本尊は法起菩薩、不動尊、藏王權現なり。別に行者堂あり、鎮守あり。葛城某といふ人絶頂に住へり。かく古よりの名山なれども楠氏の事に依て世にあまねく仰がるゝに至れり。

天野山金剛寺即ち後村上院行宮

天野山金剛寺は、本國の西南天野村にありて、堺市まで十八丁なり。故に此に詣てんには南海鐵道にて錦部驛よりするを便とす。この寺は行基菩薩の草創なりしを、後白河院の朝に紀の南山の沙門阿觀之

を再興せり。この時院の高屋朝臣憲貞といふをして、大に叡慮をよせたまひしかば、金堂食堂を始め諸伽藍輪奐の美を成せり。又源頼朝の信仰も淺からず。建久二年八條女院牒を下して、僧坊三綱七十餘坊を造らしめ、遂に法皇の第二皇子守覺法親王の裔寺となり、建保三年七月嘉陽門院故八條女院の芳信を感じ、舊風を繼て女人の高野と稱號せられたり。後醍醐天皇の時、勅願寺となりしが、正平九年後村上天皇こゝを行宮としたまへり。(此の事下條に詳にす) かくる由緒ある寺院なれば、寶物も頗る多く今に參詣人絶ゆる時なし。まづ東大門を入り天野川に架せる總橋を涉り、數多の僧坊の前を通りゆけば、右方に樓門あり、金剛寺と記せる後白河法皇宸翰の額あり。之を入れれば右方に食堂(即ち後村上天皇の假皇居天野殿)

あり、脇に御供所あり、鐘樓あり、これは最明寺時頼の寄附とぞ。
金堂は是よりつゞきたる所にしていと大きく大日如來を安ず。上に
護摩堂開山堂等あり。左方に三社あり、多寶塔あり。又五佛堂、藥
師堂、求聞持堂、加持井堂等あり。正面は即ち御影堂にして、後村
上天皇月見の宴を催させたまひし故に、觀月亭といへり。唐破風の
御殿作りなり。天皇の御手植の五本櫻は、金堂の前に在り。新葉集
に天野の行宮にてよみはべりける歌の中にとて藤原爲忠の歌あり、
君すめはみねにもをにも宮居して

み山ながらの都なりけり

樓門を出て、天野川をわたりて東に、丹生明神社あり。石段數百段、
上に三社あり。丹生、高野、水分の三神といふ。躑躅多く、花の頃

は、道も照るばかりなりと云ふ。

按に、後村上天皇この處を皇居とせさせたまひし時には、楠正
成和田正武等、主として護衛し奉れり、然るに畠山道誓關東の大
兵を率て、攻めよすときこえしかば、二人奏請して、更に御所を
この奥なる觀心寺に移しまゐらせしなり。時の狀を太平記に記し
て曰く、無用ならん人とは召具すべからず、傳奏の上卿兩三人
奉行の職事一兩輩護持僧二人、衛府官人四五輩を召具せらる云々、
攝政關白太政大臣、左右大將大中納言、七辨、八史、五位、六位、
後宮の美婦人青上達部、内侍、行衣、上臈、女房、出世、房官に至
るまで或は高野、粉川、天河、吉野、十津川の方に落行てあさま
しげなる山賤に憂身をよする人もあり、或は志賀の古京奈良の舊

都、京白河に立かへり、敵軍の中にまぎれ居て、魂を消す人もあり云々かゝる惨状にて此の處を落ちゆかせられ、觀心寺に行宮を定められしなり。

三日市錦溪温泉

三日市は京都大阪より高野へゆく街道なり。今は温泉に依てその名高く且つ錦部驛より僅に一里ばかりにして達し、併も道路平坦なれば、大阪堺等より來遊するもの絶えず。この温泉は炭酸泉にて温め

て用ふることとせり。錦溪温泉館は、所に珍らしき大厦にて、庭園も博く、料理もよし。運動場などをさへ設けたれば、大阪の熱鬧を避けんには最も適當なり。この宿はもとの本陣にて、維新の初中山侯の旗擧せられし時は、此宿より出立せしと云ふ。錦溪といふ名も侯の命ぜられしものとぞ。

觀心寺

檜尾山觀心寺は川上村大字寺本に在り。本山は役行者の創製にして、もとは雲心寺と號したりしを、弘法大師觀心寺と改む、道興大師をして(即ち實惠上人)大に之を興隆せしむ。依て之を開山とす。當時嵯峨天皇勅願所となしたまひ、淳和天皇伽藍を造營あらせらる。

爾來歷朝之を崇尊せられしが、南朝の諸帝は殊にこゝに歸依したまへり。

正平十四年に後村上天皇は、本寺に行幸し、塔中總持院を以て行宮とせられたり。當寺坊舎四十六、衆徒常に之を護衛せりと云ふ。

本尊は七星如意輪觀音にして、その本尊は淳和天皇の時建てられしが、後醍醐天皇建武中興の時、外陣を再建し、楠正成奉行たり後慶長年中に至り豊臣秀頼また片桐勝元を奉行として修理せしといふ。

塔堂あり、正成の建立なりしが、その功を卒へざる中に湊川の戦役ありしにより初重のみ存せり、之を建掛塔といふ。その他訶梨帝母天堂、及び拜殿、殊勝閣、靈應殿中門、南大門等あり。本堂の前に

禮拜石といふあり、弘法大師が、七星降臨を拜禮せし石といへり。本寺塔中の一に中院といふあり。楠氏の香華院なり。楠正晴（正成の祖父）の建立なり、この縁故を以て、正成幼時此に來寓し、院主瀧覺房に就て修學せしと云ふ。以上寺説
總門を入りて左方に新寶庫を建て、寺中の寶物を陳列しあり。諸佛像、佛畫、經文、佛器、佛具、及び古文書等あり、殊に文書は南朝に關するもの多く、正成の湊川に赴く時に書送りけといふ書翰あり。

後村上院御陵

後村上院の御陵は檜尾御陵と號す、觀心寺の上の山に在り。寺内よ

り昇る道あり。

按に天皇は正平二十三年三月御年四十一にて住吉殿にて崩御ありしを、こゝに葬り奉りしなり。住吉行幸は是より先も、屢々行はれしかば、猶本據はこの觀心寺なりけん。故に此に御陵を築きしなるべし。

楠正成首塚

楠公の首塚は觀心寺中、上人廟の東、後村上院御陵道の右に在り。これは延元元年五月湊川討死の後、賊將、公の忠義を感じその首を河内千早におくりしを、觀心寺は菩提寺たるにより、此に葬りしものなり。壇を築きて御影石の石柵を結ひめぐらしたり。石柵の中央

七本に公の裔孫なる橋成位の銘文あり、寛政五年の建立にて、文字總て百卅五字あり。その他柵外に篠崎小竹以下の碑文あまた建てり。嗚呼湊川の一戰公の運命盡きて、身首所を異にするに至りしも、その一を嗚呼忠臣楠子之墓と呼ばれて長く國民の崇敬を承け、その一は帝陵の下に埋められて長へに冥府の護衛となる。公に於てもまた瞑目すべきなり。

按に公の首級を持來りしは尊氏の家士瀬川有隣といひし者にて、此の葬事を監督せしは公の家士安間七郎生地兵衛といへり。寺説

光瀧寺四十八瀧

光瀧寺は高向村大字瀧畑に在り。福玉山と號す。當山は欽明天皇の

御願にして開基は行滿上人といへり。不動明王を安し、脇士に千手觀音、役行者をまつれり。多寶塔あり。本堂の前に高さ五丈の光瀧あり。仍て寺名となり。山ふかく上りゆけば瓔珞の飛泉、千手の瀧、准肥の瀧、清冷の瀧、馬頭の瀧など、名づけしもの多く、尙おくにいたれば、四十八瀧ありといへり。避暑には最も適當の地なり。されど山深くして旅館等の設なければ、その用意して勝景を探るべきなり。

和泉國

和泉國は、もと河内國茅渚の海邊の諸郡なり、神功皇后新羅を征し給ふ年に、地中より飛泉涌出せり、因て泉郡と名づく、皇后三韓より凱旋して、紀伊國に至りませる時、御舟を下りて、この清泉を賞し給へり、當時人民、德澤上に昭なれば國土靈泉を出せりとて、皇后の德を頌し奉りぬ、今の國府の清水これなり、元正帝靈龜二年二月、河内國大鳥、和泉、日根三郡を割きて和泉國を置く、後和泉郡を分ちて泉南郡を置き凡て四郡と爲ししを、明治廿九年に至り改めて一市二郡と爲し、市を堺といひ、郡を泉南泉北といふ、その疆域東は河内に堺し、西は海に濱し、南は紀伊に隣り、北は攝津に接す、南北十二里東西僅に五里許なり、昔神武天皇東征して大和に入らむとし給茅渚は和泉國の總稱なり、

ひし時、皇兄五瀨命敵矢に中りければ、更に南より廻りて紀州より入らむとし、男水門に至りて、矢瘡を洗ひ給ふ、これより其處を名づけて血沼といふこと日本紀に見えたり、奈良朝の時、離宮を置きて珍努宮といひ、元正聖武二帝こゝに行幸あり蓋しこの宮は國府にありしが、さてこの海岸攝津よりかけて一帯を茅渟海といふ、萬葉集に、

妹がため貝を拾ふと茅渟の海に

ぬれにし袖はほせと乾かず

茅渟の海の濱邊に小松根ふかめて

我戀ひわたる人の子ゆゑに

堺市

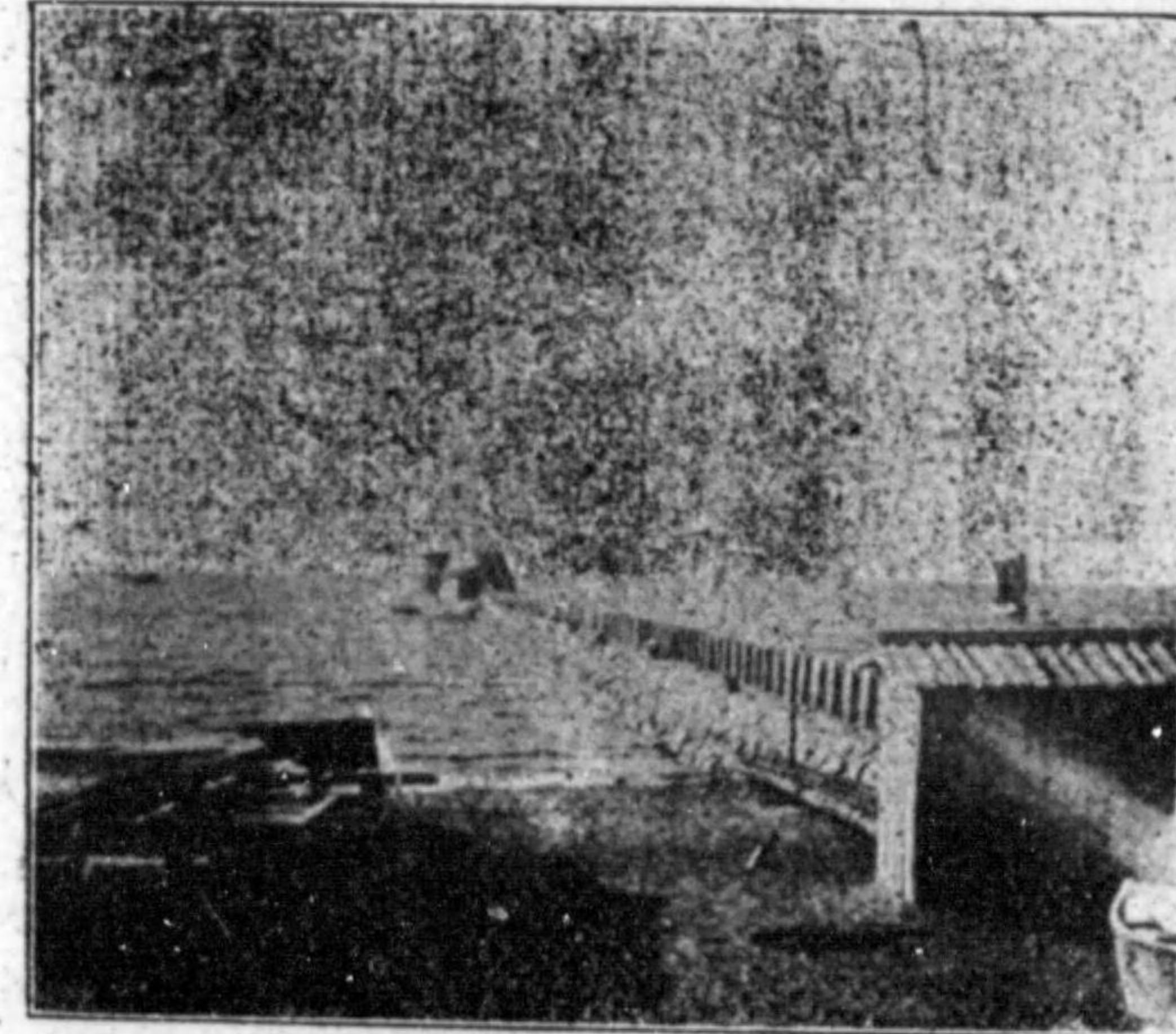
堺市は、攝河泉三州の堺にありといふをもてかく名づけたり、大和川の海口に沿ひて、西に堺港を擁し、南北三十町東西十五町ありて、市町一百九十五ヶ町、戸數九千三百五十六戸、人口四萬七千二百餘人を有する一商市なり、市街の様區畫端正にして、東は三國耳原の丘を控へて、遠く大和河内の連山を望み、西は茅渟海を隔て、淡路島を見、南は高石濱寺に接して、紀州の遠巒を眺むなど風光極めて佳なり、此地昔は大鳥郡に屬して、南北二莊に分てり、即ち中央大小小路より南を南莊といへり、古の鹽穴郷なり、北を北莊といへり、古の土

師郷なり、明徳年中中山名氏清こゝに城を築きて泉府と名づく、氏清滅後周防の大内義弘守護職を兼ねてこゝに居る、應永六年義弘滅びて、細川満元こゝに守護たり、享祿年中その家人三好長慶の旗下十河存保こゝを守りて、南海四國を控制せり、天正五年織田信長根來寺の僧兵を防がむ爲に、南莊に陣を据ゑ、松井友閑をもて國務を司らしむ、同十三年豊臣秀吉根來寺を滅して、營を北莊に徙し、小西攝津守行長をもて泉州一國の政事を掌らしむ、これを堺政所といふ、徳川氏に至り、改めて奉行と爲し、明治の初年に堺縣を置き、後廢して大阪府の管轄と爲し、市制を布くに及びて、更に堺市と爲す、

戰國の世にありて、堺は我國唯一の開港場にて、海外の貿易皆この

港に於いてせり、故に當時は我國第一の繁華の地にして、人口も今より數倍し、豪商人物多く出たり、小西父子の商將に於ける、肖柏宗椿の和歌連歌に於ける、紹鷗利休及び今井父子の茶道に於ける、喜多七大夫車屋道説宮尾道三の能謡曲に於ける、惠藤源左衛門の横笛に於ける、高三隆達の小歌に於ける、鼠樓栗新左衛門の滑稽に於ける、瑞溪岐翁の禪學に於ける、土佐久翌の書に於ける、泉南の書に於ける、松井宗閻の醫に於ける、意雲、利玄の碁に於ける、温故の將碁に於ける、文阿彌の瓶花に於ける、舜慶、甫竹の茶器に於ける、一節道清の鼓胴に於ける、宗鐵の鐵工に於ける、遊女地獄の盛名に於ける、何れも一代に名を轟かせり、當時文物繁昌の様これを推して知るべし、豊臣氏の時には、繁華の幾分を大阪に割か

れ、徳川氏の時に至りては、貿易の権利を長崎に移されてより、この地大に衰微せり、天明寛政の際、吉川俵右衛門、獨力をもて堺港を築造し、諸國の船舶を吸集して、大に當市の繁華を挽回し、以て今日に至れり、當市には、市役所、警察署、區裁判所、收税署、電信局、郵便局、中小學校、商業會議所、銀行諸會社あり、産物は清酒、綬通



(國泉和) (八二三)

をもて、その尤なる物とし、その他薰香、庖丁、眞田織木綿、醬油、煉化石、櫻鯛等あり、堺停車場は、同市吾妻橋一丁目にありて、北に大和川停車場、南に港停車場ありてこれを挟む、住吉停車場より僅に二哩餘なり、

戎島

堺停車場の東にあり、寛文四年波濤の爲に、この島成りぬ、當時長さ四尺の龜と蛭子の石像とを海中に得んとて、奉行水野某市人に令して、堤を築き、石を周らし燈臺を建て、蛭子の社を設けて、石像を祭り、辨天の祠を立て、靈龜を祀りたり、因て名けて戎島といふ、これより一の港となりて、船舶出入し、茶亭、妓樓等軒を接して、絃

(九二三) (國泉和)

歌の聲喧かりしが、今は大濱の港灣海中に突き出されて、この島市中に編入せられ、諸會社諸工場出て来て、帆檣は烟突と變じ、絃歌は蒸氣の笛響とかはりぬ、されど蛭子の社は、依然たるこそかしこけれ、

大和橋

大和橋は新大和川に架し、堺市の北端にあり、さて大和川は大和より流れて、元は大阪城の北より、淀川に入りしを、寶永元年河身を改修して、住吉の南より直に海に注がしめたり、これを新大和川といふ、橋は南北に架して、北は大阪南は和歌山に達する一大國道にて、長さ二百間餘、南海高野兩鐵道の鐵橋、その左右を挟みて、

四方の眺望いと明媚をさほむ、橋を渡りて堺市に入る所を並松町といふ、昔住吉の霰松原よりつゞきて、海岸の松並なりしより起りし名なるべし、

七堂濱

堺市西濱の古名なり、昔高渚寺の七堂伽藍のありし舊跡とぞ、續日本紀に寶龜四年勅して、大僧正行基の管する和泉國高渚寺に、田三町を寄する由見えたり、さればこの伽藍は、行基の建てしものなるべし、

高須稻荷社

高須町にあり、元和中鍛冶芝辻道逸の勸請したるものとぞ、昔はこゝに遊廓ありて、遊女地獄大夫、一休禪師と唱和したるは、即ちこゝなりとぞ、今もその餘波をとどめて、其近街に遊廓を殘せり、

經王寺

九軒町東一町にあり、日蓮宗にて京都妙覺寺に屬す、開基は日延上人にて、應永年中の建立なり、寺内に芭蕉の句碑あり、

神明社

神明町にあり、祭神は兩大神宮にて、天武帝の白鳳年中に勸請したりとぞ、例祭は七月十六日十月十六日なり、

西本願寺の別院

神明町の東二丁にあり、信證院といふ、文明年中樫木屋道顯といふもの、我が居宅を割きて當院を建て、蓮如上人に獻じたる、故に樫木屋御堂ともいふ、本尊は阿彌陀佛にて、開祖親鸞上人の影を安置す、されば當院は八世蓮如上人をもて開基とす、その廟南にありて中祖堂とす、

善長寺

神明町にありて、別院に隣る、淨土宗にて本尊十一面觀世音なり、永正十三年三好善長、この地に陣屋を構へし時、靈夢によりて松樹

の下より、この本尊(長八寸)を得たりとて、松觀音と稱す。堂前に將軍松あり、善長大和筒城主筒井某を討つて、凱旋の折に敵首をこの松枝に懸けて酒宴し、軍卒をねぎらひし故に、この名ありとぞ、

成就寺

宿屋町にあり、日蓮宗にて開基は日驗上人、應永年中の創立なり、天文年中六條相國寺の日助上人、亂を避けてこゝに來住せし故に六條ともいふ、

金光寺

成就寺の南横手にあり、時宗にて本尊は藥師佛、仁明帝承和元年の

創立、開基は眞澄上人なり、昔は有名の藤花ありしが、今はそれさへ枯れて、法燈もかすかになりぬ、

妙國寺

材木町の東にあり、堺停車場より十二三丁、日蓮宗にて廣普山と號す、開基は日珣僧正にて、寺地は三好豊前守之康入道實休の寄附、諸堂は油屋常言の建立なり、實休の塔ありて、妙國院殿光德實休と鑄す、境内三千坪ありて、日宗の一本山、本堂には日蓮上人と日珣上人との像を安置す、方丈の庭中に有名の蘇鐵あり、こは實休嘗て當所に居住の時、始めて植ゑしものにて、稀世の大株たり、一根十餘株に分れ、大枝廿三本小枝七十八本、高さ二丈餘あり、三百餘年

の星霜を経て、翠色今に滴るが如し、この他寺の什物ども數多あり、蘇鐵について、近來名物を添しは、土佐藩士十一人が、この寺にて切腹せし時用ゐしといふ、白木の三寶十一個、寺内の茶店にあり、血痕黒くつきたり、その墓は本寺の裏手寶珠院にあり、



(六三三) (國泉和)

寶珠院

小さい寺院なれど、右の十一士の墓ある爲に、妙國寺に蘇鐵見に来る旅客は、必ずこゝに詣づ、これは徳川の季世に、舊土佐藩堺の警衛を爲したるに、衛士佛國人と衝突してこれを殺したる罪により、箕浦元章以下十人切腹を命ぜられたる處なり、その遺骸をこゝに葬りて、今に墓石十一基立並びたり、妙國寺の南の地を殿馬場といふ、奉行屋敷の跡にて、今は官衛學校等あり、

菅原神社

殿馬場の南一町戎の町にあり、境内方一町あり、昨年の一千年祭に、本社樓門等修繕を加へて、頗る美觀となりぬ、小西行長寄附の松、影向梅、和泉式部塔、連歌所及び多くの攝社末社等あり、本社の神影は、菅公太宰府にて、自ら彫刻し給ひし七天神の一なるが、延喜年中この津の海濱より上りたるを、祠を建て、祭りたるものとぞ、後世社殿兵火にかゝりたるを、明暦三年再建して今に至れり、或は云ふ當社は昔鹽穴郷湊村にありて、鹽穴天神と稱せしを、中古今の所に勸請したるなりと、鹽穴毛須土師高石等は、菅家の始祖天穗日命已來の舊地なり、されば鹽穴天神は、やがて穗日命の神廟なりしを、後世菅公を合せ祭りしならむかと名所圖會にいへり、

東本願寺別院

菅原社の北門の東二町(戎町)にあり、本尊は阿彌陀佛なり、慶長年中西然寺の善順房、十二世教如上人に歸依し、真言宗を改めて浄土真宗となし、羅漢院を奉りて、南御堂と稱せり、故に今も尙羅漢院の號あり、西別院にも劣らぬ結構なりしが、八九年前火災にかゝりて再建せり、

向泉寺

市の町の東にあり、真言宗なり、天平年中行基僧正、三國丘なる向井領方達の社地に精舎を營み、千手觀音の像を安置す、今の本尊

是なり、永正年中兵火にかゝりて、本堂講堂以下悉く灰燼となりぬ、後世再建して方違社をば残して、寺院及び民家を、今の地に移せり、舊地は攝河泉の堺なれば、三國山と號し、舊寺は攝河に背きて泉州に向ひければ、向泉寺と稱す、

如意神社

市の町の東にあり、元は寶嚴庵の寺内なりしが、今は神社のみとなり、祭神は彦火々出見尊にて、尊嘗て海神より満干の寶珠を得給ひて、萬事意の如くなりしより、かく名づけたりとぞ、住吉の末社なり、當社の北に熊野小學校あり、去る明治十年天皇陛下御巡幸の際、當校に駕を枉げさせられ、生徒の授業を天覽ありき、今に玉座

の跡を保存せり、

開口神社

甲斐町東一町にあり、堺停車場より五町なり、式内社にて祭神は事勝食勝國長狹命なり、後に生玉神牛頭天王を合せ祭りて、住吉外宮と稱す、朝廷より二十年に一度住吉の社を改造ある毎に、當社も同じく改る例あり、この地元は鹽穴郷なる、開口、木戸原三村の間に當りければ、三村明神ともいへり、神功皇后凱陣の時、軍艦九艘、この浦に着きたる所を、後世九艘小路といひ、御船の舳を松に繋ぎし所を舳松といふ、明神皇后と共にこゝにて、御食をさこしめし給ひし時、口を開き給ひしかば、開口といふとぞ、聖武帝の朝に至

り、行基僧正に勅して、こゝに寺を建てしめ、密乗山念佛寺と號せり、爾來代々の勅願所として、繪旨院宣、并に將軍家の文書等多くあり、眞言の靈場となりて、世に大寺といひき、明治維新に至り、神佛の混交を停め、寺を廢して諸堂を毀ち、唯紀念として三重塔を殘せり、今の本社は、明曆九年の造營にて、例祭は七月十二日と十一月十二日とにて、大祭は九月十二日なり、境内茶店寄席等あり、又櫻牡丹等あるが故に、參詣人群集し、市中第一の繁昌社たり、名物大寺餅あり、

海會寺井

開口社西門の前にあり、一名を金龍井といふ海會寺は今南宗寺の

境内にあれど、元はこゝにありたり、開基龍峰和尚龍神の告によりて、この井を掘りたりと言ひ傳へて、泉州第一の名水なり、

宿院胃社

開口社の南一町、即ち宿院町の東一町にあり、攝津住吉明神の御旅所なり、方二町の地にして、西には大鳥居太しく立ちて、東北を夏越岡といふ、こゝに二祠ありて、北を楫取社、南を寶御前といふ、岡の前に朱の鳥居、朱の瑞籬あり、毎年八月一日(昔は六月晦日)荒和の御禊に、住吉の神輿こゝに神幸ありて、禊祭あり、近時大鳥神社も、この前一日こゝに神幸あり、

壬二みな月の今日のさかひにみそぎして

家 隆

千歳をのふる神の宮人

夫木みな月のなこしの杜のほととぎす

資 隆

聲のかざりはこれにやあるらむ

瑞籬の右に池あり、飯匙の池といふ、昔彦火火出見尊海神より得たる干満の寶珠を納めたる所と言ひ傳ふ、また表の鳥居の右に胃社あり、昔住吉明神三韓を征伐し、還りてこゝに御胃を納めたりとて、後に社を建て、應神天皇神功皇后、玉依姫の三座を祭れり、この社は白鳳年中に創められしものといふ、この杜の前、南北の通を山の口筋といひて、當市中第一の繁華の町とす、

祥雲寺

宿院の東にあり、俗に松の寺といふ、堺停車場より七八丁、禪宗にて紫野大徳寺に屬す、開基は澤庵和尚にて、寛永二年の創立なり、佛殿には聖觀音、昭堂には澤庵の像を安置す、方丈の東の庭に五葉松あり、枝葉四方に廣がりて翠蓋をかさねたるが如し、これ松の寺の名ある所以なり、これ昔豊公の鉢植を地に移したるものとぞ、南の庭には蘇鐵あり、妙國寺に次いで古株なり、これは朝鮮より持ち來りしものとぞいふ、寺中に種々の寶物あり、

方違神社

攝河泉三國の堺向井といふ所にあり、堺停車場より十二三丁あり、この邊を總て三國が丘、または三國が辻といふ、本社祭神は神功

皇后にて、皇后征韓の時、天神地祇を祭り、凱旋の後こゝにて方違の祓をなされし故に、後世神靈をこゝに留め祭りて、方違の社と稱す、今も世人家宅を轉ずる時は、當社に參詣して、除厄の神符を受くるを例とす、

南宗寺

堺市の南端旅籠町の東にある一大寺院なり、龍興山といふ湊停車場より五丁ばかり、禪宗にて紫野大徳寺に屬す、開基は正覺普通國師にて、澤庵和尚の中興なり、本尊中央は釋迦佛にて、左は文珠右は普賢なり、惣門山門本堂昭堂方丈客殿影堂鐘樓浴室等、整然として備はれり、寺内に牡丹花宵柏塔一開齋紹鷗塔千利休塔、堺奉行喜

多見若狹守忠勝碑あり、また乳守明神社鎮守八幡宮あり、客殿には岸和田城主小出吉英及び堺奉行石河土佐守の影あり、塔頭には昔長慶寺、天慶、寶光、本源、勝善の四院、在中、四甫、集雲、臨光、徳泉、移春、厚徳の七庵ありしが、今は減少せり、初め普通國師大林和尚とともに、草庵を船松の傍に結びて閑居せしに、三好修理大夫長慶、國師に歸依して、弘治二年寺地を宿院の南に移し、父筑前守元長の爲に、寺院をこゝに建て、龍興山南宗寺と號せり、(元長を南宗院殿といふ)この時長慶河内飯森城にありしが、自ら檢校して、手斧始を爲し、同三年五月朔日、三萬貫の領地を寄附し、佛殿法堂禪堂七層塔鐘樓經藏山門總門九十二間の廻廊百八軒の塔頭、衆寮寶藏方丈小方丈庫裡浴室大書院小書院對面所

知客寮施藥所渡御門花月亭等巍々堂々と成りぬ、同年十一月十五日
供養あり、導師に普通國師、その他諸山の太徳、大檀那は即ち三好
長慶夫婦、京都よりは大臣公卿來會し、遠近の貴賤老若群參して、
いと盛大なりき、さて神廟には、祖先三好長輝の靈を祀り、神像に
は長輝の甲冑に弓箭を帶したる馬上の像を、黄金もて長八寸に鑄て
本祠に安置し、寶藏には長輝の兵器を藏めたり、天正元年に至り、
禪院十刹の格に准ぜられ、堺津第一の大伽藍となりしが、同二年松
永久秀が凶徒當津に亂入し、黄金の神像を盗み、火を社頭にかけて
逃去りぬ、この時堂舎過半回祿にかゝり、元和元年四月廿七日には、
重ねて兵燹にかゝりて、一字も残らず、この日開山普通國師示寂せ
り、その後澤庵和尚これを再建し、岸和田城主小出吉英、堺奉行喜

多見忠勝、但馬の山名全高等、力を戮せてこれを助け、將軍家より
も税田を賜ひて、終に今日の觀を殘せり、その後台徳大猷の二將軍、
當寺に入り坐雲亭(鐘樓)より、西南山海の佳景を賞せられたり、
今は樹木繁茂して、四方の眺望は隠るれども、建築の雅致なる庭園
の幽邃なる、堺市に遊ぶものは必ず、杖を曳くべき淨刹たり、

海會寺

南宗寺の境内の東にあり、禪宗にて宿松院と號す、京都東福寺に屬
す、開基は廣智國師(聖一國師三世の後)にて、正暦元年の創建な
り、元は開口社の西門の前にありしを、元和兵火の後こゝに移せ
り、

大安寺

南宗寺の惣門の前より東一町にあり、禪宗にて東福寺に屬す、開基は德秀和尚（聖一國師五世の孫弟）なり、應永元年の創建にて、佛殿には聖觀音を安置す、方丈は元堺の豪商納屋助左衛門の居宅なり、助左衛門嘗てその書院に七寶を鏤めて、美麗を盡し、が、或る時松永久秀來り見て、滿つれば欠くる習なればとて、故意に刀を抜きて楹を傷け、災を未萌に防ぎたり、其後助左衛門禪法に歸依し、この書院を當寺に寄附したるが、即ち今の方丈なり、久秀の刀痕今に残れり、助左衛門は天正年中呂宋に渡りて貿易し、文祿三年に歸朝せり、當寺の什物に助左衛門の遺物あり、

鹽穴寺

大安寺の西一町新在家にあり、眞言宗にて、和銅中の勅立にて、本尊十一面觀世音は當津の海中より、上りたりとて、蠟殼多く附着せりとぞ、昔は封境廣大にて、當國の名刹なりしが、今は衰廢して見る影もなくなりぬ、

少林寺

釣狐社

鹽穴寺の北一町少林寺町東櫓屋町にあり、禪宗にて紫野大德寺に屬

す、本尊は阿彌陀佛にて、開基は桃源和尚、元徳年中の建立なり、昔は封域いと廣く、今の寺地町少林寺町、皆その境内なりしを、中世衰微に及びたり、初め小林某檀越として建立しければ、小林寺と稱せしを、達磨大師の少林寺に擬して、少の字に改めたり、寺内に通心靈洞といふあり、俗に釣狐社といふ、稻荷大明神を祭る、初め永祿中に當時の塔頭に耕雲庵といふありて、この庵主を白藏主といへり、この僧いたく稻荷を信仰せしに、或る時竹林より三疋の白狐現れ出でぬ。即ち抱き歸りてこれを愛育せしに、この狐能く馴れて使命に應ぜり、白藏主の甥に獵を好むものあり、狐これを恐れ、一夜白藏主に化けて、甥の家に至り、殺生を教戒せり、甥狐の化けたるを悟り、密に道に要して、これを捕へきといふ、狂言師

大藏といふものこの事を聞きて、狂言に作り釣狐と名づけたり、これよりこの狂言を爲すには、通心洞の竹林の小篠を伐りて杖となすこと故實となれりとぞ、享保十八年京都吉田家より神號を授けられて通心靈社といふ、

旭蓮社

舳松社

小林寺の南一町寺地町東にあり、淨土宗にて支那廬山派の一本寺鎮西流義なり、甘露山大阿彌陀經寺と號す、本尊は上品阿彌陀佛にて、開山は澄圓上人なり、祖師堂には上人の像を安置す、上人は花園帝文保元年に渡り、廬山の東林寺に入りて修行し、二十七州を巡

行して、後醍醐帝元亨元年に歸朝し、正中元年當所に蓮社を創立して、盧山の勅額を賜ひ、そののち後村上、光明、崇光三帝の恩寵を蒙り、伽藍を増設し、殿堂門廡三十八宇、塔頭僧房三十餘所に及び、終に鎮西流白旗の正統を、我國に傳へたり、當寺の鎮守に、舩松神廟あり、初め神功皇后三韓より凱旋し給ひし時、軍艦九艘の舩頭の向ひし所を、九艘小路といふ、即ち當寺の北門の前の町なり、また九本の松にその船を繋ぎしより、九本松町或は舩松ともいふ、後世こゝに社を立て、九本松明神と稱す、即ち舩松神廟なり、

大濱公園

停車場の西に堺港あり、その灣盆池の形を爲し、その海洋の出口には、南北に突堤あり、北を小波止と爲し、南を大波止と爲す、大波止の岬に燈臺を設く、船舶みなこの突堤の間より出入す、北の築地を北濱公園といひ、南の築地を大濱公園といひ、停車場より二三丁なり、茅渚の海に面して、旗亭酒樓層々立並び、西南には紀淡の翠巒を望み、東北には和河の連峰を見て、風景開豁、風涼しく月明に、魚鮮に酒醇く、四季朝夕の遊興尤も心目を娛樂せしむ、北濱公園にも茶肆酒店等ありて、舊曆三月上巳には、沙干狩の遊尤も盛なり、さて大濱にては、毎朝漁船四方より入港して、魚市を開く、その盛況東京の日本橋に劣らず、本年大阪博覽會につき、當所に同

會附屬の水族館を新築せり、

泉北郡

百舌鳥耳原中陵

仁徳天皇の山陵にて、船松村大字船松にあり、堺停車場より廿四五丁、市の東に當れり、世に大山陵といふ、延喜式には兆城東西八町南北八町陵戸五烟とあり、後世封域減じて外隄千二百八十三間、中隄九百五十五間、山の根廻り百六十三間、前峰高さ十四間、後峰十六間餘となりぬ、四畔に陪塚九箇あり、明治に至り大に修理を加へられぬ、山陵中尤も廣大なるをもて世に大山陵といふ、初め天皇豫め山陵を攝津國難波の地に築き給ひしに、故ありて果さず、

空しく荒廢せり、故に荒陵といひ、後人稱して茶白山といふ、更に河内國石津原（今は和泉國）に行幸して、陵地を定め、山陵を築かしめ給ふ、たましく鹿走り來りて、役民の中に入りて仆れ死しぬ、人々怪しみて、その痕を探りしに、百舌鳥耳の中より飛び去りぬ、因て耳中を檢め視るに、悉く昨ひ破りたり、こゝにおいて其所を名けて百舌鳥耳原といひしこと日本紀に見えたり、そもく歴朝の山陵、多くは荒廢して、甚しきは其所を亡ひしもあり、この陵に至りては、多少の荒廢はありしも、今日まで大山陵の名を存して、巍然として泉北に聳えしものは、その仁徳の宏大なりしを仰ぎ知るべきなり、

百舌鳥耳原北陵

反正天皇の山陵なり、向井村大字中筋にあり、堺市戎町の東に當れり、陵邊に楯井池あるをもて、世に楯井陵といひ、山をば俗に摺鉢山といへり、延喜式には兆域東西三町南北二町陵戸五畑とあり、後世荒廢して、東西二百三十間に減じ、周池半は田となりぬ、明治に至り修理を加へられたり、

百舌鳥耳原南陵

履仲天皇の山陵なり、神石村大字上石津にあり、大山陵の西南に當れり、延喜式には兆域東西五町南北五町陵戸五畑とあり、後世減じたり、

萬代八幡宮

て周隄八百八十三間山の根廻り六百三十六間、前峰の高さ十四間、後峰十六間となりぬ、明治に至り大山陵等と同じく修理を加へられたり、

赤畑村にあり、耳原南陵の東南十町ばかり堺停車場より廿四五丁なり、この地昔は土師郷毛須莊なり、本社祭神は應神天皇にて、住吉春日及び神功皇后を合せ祀る、當社は欽明帝の時の創建にかゝりて、古は社殿巍々たりしが、後世兵燹にかゝりて荒廢し、本殿神宮寺鐘樓繪馬殿辨天社藥師堂等ありしを、明治に至り、神佛の混交を廢し、今は神祠の外には、唯神宮寺の塔中なりし光明院を存する

のみ、本社ほんしやの祭禮さいれいは、陰曆いんれき八月十五日なるをもて、當夜たうやは觀月くわんげつをか
ねて參詣さんげい人多く打集うちつどふ、本社ほんしやの西にしに古陵こりやうあり、御廟山ごべうざんといふ、應神おうじん
天皇てんわうの舊陵きうりやうと言いひ傳つたへぬ、

按あんずるに應神帝おうじんていの山陵さんりやうは、現げんに河内國かはちのくに南河内郡みなみかはちのくに古市村ふるいちむら大字譽田おほあさごけだにあり
て、惠我ゑが藻伏もせを崗陵かみさ、ぎといふ、又また傍かたはらに八幡宮はちまんぐうありて、譽田こけだ八幡はちまんとい
ふ、事ことは河内かはちの部ぶに記しるせり、萬代まんだい藻伏もせ國音こくおん相近ちかし、かく同おなじ社しゃ
陵りやう二國ふたこくに分わかれあるは如何いかんといふに、社家しゃけの説せつによれば、應神帝おうじんていは
最初さいしよ百舌鳥野もずのに葬はうむり奉たてまつりしを、後のち改あらためて譽田こけだに遷うつり奉たてまつりしもの
とぞ、仁德帝にんとくていの山陵さんりやうを、御生前ごせいぜんに荒陵あればかより百舌鳥野もずのに改あらためトし給たまひ
しなど、思おもへば、この説せつ或あるひは然しからむ、さればこれなる御廟山ごべうざんは、
傳説でんせつの如ごとく、應神帝おうじんていの舊陵きうりやうなるべし、さて又また萬代まんだいをモズと訓よむ

は、泉州志せんしうしの説せつに、萬代まんだいを毛須もすと訓よむは非ひにて、毛須もすは莊號さうがう、萬
代まんだいは村號そんがうにて、中世ちうせい萬代氏まんだいし毛須莊もすさうを領れうして、毛須殿もすどのと稱しょうせし故ゆゑに
俗誤ぞくあやまりて萬代まんだいをもて毛須もすと爲なし、なりとぞ、

○ 禪海寺

禪海寺ぜんかいじは一路山いちろざんといふ、港驛みなとえきの東南港停車場とうなんみなとせいでいしやばより七八丁、石津上方いしづじやうほう
市村いちむらにあり、禪宗ぜんしうにて京都大德寺きやうとたいとくじの末派まつばなり、開基かいきを一路居士いちろこじとい
ふ、この人元ひともとは仁和寺にんなじ一代いちいたいの門主もんしゆなりしが、世よを遁のがれてこゝに閑居かんきよ
し、詩歌しかを詠えいじて清貧せいひんを樂たのしむ、一休いつきうと同時どうじにて、或ある時とき一休いつきう來きたり
問とひて、萬法有まんぽうあり道みち、如何いかん是一路いちろといひしに、一路答いちろこたへて萬事可ばんじべし一休いつきう

如何是一休、といひけり、嘗て歌を詠じて、
世をしのふいほりの軒のくちぬれば

生きても苦の下にこそすめ

境内に春懸松あり、これは居士生前に於て、一の春をこの松が枝に懸けくだし、往來の人の志あるものに食物を恵まれ受けつゝ、露命を繋ぎけるに、或る時里の童ども、馬糞破鞋など入れ置きければ、居士これを見て、我が糧盡さぬとて、これより斷食して終りけるとぞ、

家原寺

華林寺

海禪寺の東南十五六町家原村にあり一乗山といふ濱寺停車場より十入丁なり、開基は行基菩薩、中興は興正菩薩、本尊は文珠にて、その毫中一寸八分の黄金佛あり、こは天竺波羅門尊者、天平十八年南都東大寺建立の折、持ち來りしものとぞ、境内に本堂、多寶塔、不動堂、藥師堂、清涼院、鎮守社、誕生木、放生池、辨天祠、樓門址、二王門等あり、
當時は、もと大僧正行基誕生の宅地にして、後更に精舎となしたるなり、行基は天智帝七年に生れたり、父を高志貞知といふ、百濟王の裔王仁の後なり、行基聖武帝天平十二年に我が宅地を捨て、寺と爲し、一乗山家原寺といふ、家原とは我が家宅の原地といふ義にて、清涼院は即ちその居室なり、行基都鄙に周遊して、衆生を教化

し、四方要害の地には、橋を造り坡を築きて、百姓その利を蒙るもの多し、聖武帝いたくこれを敬重し給ひ、詔して大僧正を授けらる、時人尊び稱して行基菩薩といふ、その留止の所には、皆道場を建て、畿内のみにても、凡て四十九院ありきとぞ、天平勝寶元年二月八十歳にて遷化せり、
本寺の近傍蜂田村に華林寺あり、昔は蜂田寺といひしが、今は家原寺の奥院と呼べり、本尊薬師佛にて、同じく行基の開基なり、行基の母を薬師女といふ、蜂田首虎身といふものゝ女なり、故にその宅地を捨て、追福の爲にこの寺を建てしなりと、

家原城址

家原村にあり、戦國の時寺町左近將監、雀部次兵衛の二人こゝに城を築きて威を震ひしが、永祿十二年正月元旦、三好山城入道笑岩齋の爲に攻め陥されぬ、按に姓氏録和泉國の皇別に雀部氏あり、されば次兵衛は舊來の國人にや、

乳岡 蛭子神社 行家松

乳岡は上石津村の東にある荒陵なり、或は石津連の祖野見宿禰の墓とも、または乳朝臣の墓とも言ひ傳へたり、いたく荒廢せりといへども、慥に陵墓の形を存せり、
上石津下石津の兩村に、蛭子神社あり、延喜式には石津大神社とあり、社傳には蛭子神、神石を携へて、この浦に漂着せり、故に石津

といふ、孝昭帝七年八月十日に、始めて社を建て、事代主神を合せ祀るといへり、とにかく蛭子の古社なり、土佐日記に「石津といふところの松原あもしろくて濱べとほし」とあり、下石津の川側に行家松とて、昔十郎藏人行家討たれし古跡ある由、物に載せたれど、平家物語を按ずるに、行家は和泉國八木郷にて捕はれ、淀の赤井河原にて斬られし由あれば、こゝにはその首にても梟せしにや詳ならず、

濱寺公園

高石神社

港停車場の次驛に濱寺停車場あり、これを降ればやがて濱寺公園なり、この公園は區域頗る宏大にして、南北二十町東西十町ありて、所謂古の高石濱なり、今は即ち高石濱寺の二村に分れて、白砂青松遠く相連れり、さてこゝを濱寺としもいふは、昔醍醐帝元亨年中、三光國師(名は覺明孤峰と號す)勅を奉りて、こゝに寺を開き、大雄寺と號せり、伽藍巍々として、海濱に聳えたり、人呼びて濱寺といへり、後世寺院廢滅して、濱寺の名古松とともに残りたり。海邊一帶に古松多く、西に淡路島を見、北には須磨明石一の谷鐵拐峰を望み、南に紀の海阿波の鳴門を眺めて、風光明媚のさまは、舞子の濱にも劣らぬ景色なり、元は紀路街道にて、驛路の鈴聲松風濤音と相和せしを、今は公園となりて、汽車さへ往來することになり

たれば、遊客群集して、茶亭酒樓波光松影の間に立ら並びたり、中にも海濱院尤も名高し、院の門前に碑あり、贈右大臣大久保利通公の、

音にさく高石の濱の濱松も

世の仇波はのかれざりけり

といふ歌を刻みて、裏に當時の縣令税所篤男の文をゑりたり、これは明治の初にこの濱松を、士族の授産に拂ひ下げて伐採したるを、またく大久保公内務卿の職を帯びて巡廻の途次、これを見て、名所の廢滅を歎き、この歌を詠じて、この舉を中止したりければ、後人公の徳を頌して、この碑を建てたるなり、この濱の歌、古來勅撰集以下に多く載せたり、

古今 おきつ波高石の濱のはま松の

貫 之

名にこそ君をまちわたりつれ

一宮紀伊

金葉 おとにさく高石の濱の仇波は

かけしや袖のぬれもてそすれ

後鳥羽院

御集 戀すてふ名のみ高石の濱千鳥

なくくかへる袖のあたなみ

この濱續さ海道の西側に、高石神社あり、元は高石莊の内なり、式

内社にて高石氏の祖王仁を祭る、後世たゞ天神と稱す、

大鳥神社

大鳥村にあり、千種の森と云ふ濱寺停車場より十一丁、官幣大社に

て式内和泉の一の宮なり。縁起に依れば祭神は日本武尊なり、尊東征の歸途、伊勢國能褒野にて薨り給ひければ、其所に葬り奉りしに、白鳥となりて飛び去り大和國琴原に留まり、其所に陵を築きたるに、又飛び去りて河内國古市郡に留まる、因て又そこに陵を造りしに、白鳥終に天に翔けりぬ、其後宮殿を同國大野里に建て、これを祭りたるが、即ち今の大鳥神社なり、と云ふ（近代大鳥神社は大鳥氏の祖神といふ説あり、例祭は八月十三日にて神殿の製作普通の神社と異なり、大鳥式とて、その道の人々之を賛す、神庭清肅塵をとゞめず、攝社には大鳥美波比神社、大鳥北濱神社、大鳥濱神社、大鳥井瀬神社あり、美波比神社は境内にありて、天照大神を祭り、北濱社は境外濱寺村大字下字角垣内にありて、吉備穴戸武姫

命を祭り、濱社は高石村大字今在家字井戸森にありて、兩道入姫命を祭り、井瀬社は八田莊村大字堀上字大明神山にありて、弟橘姫命を祭り、何れも式内なり、以上を總稱して和泉の五社といふ、平治物語に云く、平清盛子重盛と共に熊野に詣てしに、京都の兵亂を聞き、半途より歸り、この社に詣り、神馬を献じてよめる歌「かひ子をよかへりはてなはとひかけりはこくみたちよ大鳥の神」馬の名飛鹿毛といひしよりよみしなり、さて五社ともに戰國を経ていなく衰廢せしを、慶長七年内大臣豊臣秀頼、これを再興せり、其後大阪の役に、本社兵火にかゝりしが、寛文二年堺奉行石河土佐守利政これを修成せり、本社の境内に昔神宮寺ありて、大鳥山勸學院神鳳寺といひしを、明治に至りこれを廢したり、

和田城址—和田新發意源秀墓

和田城址は和田村にあり、和田氏の家系によれば、楠左兵衛尉成康の次子太郎親遠、始めて河内より和泉の和田村に移住し、和田と稱す、その孫正遠は正成の外甥なり、されば和田城は親遠の築き始めしものと見えたり、同村に新發意源秀の墓あり、俗傳に源秀楠正行とともに河内國荊屋村に戦死せり、その家人遺骸を本郷に葬る、後世その所に寺を立て多門天安ず、これ即ち源秀の守本尊なりとぞ、(河内四條畷の條参考すべし、)

長福寺

神谷村大字鉢が峯にあり、鉢峯山開谷院と號す、眞言古義にて、開基は法道仙人として天竺人なりとぞ、二王門の前に菅茸社あり、これはもと當山の良五丁ばかりなる襲峯にありたるものにて、大鳥社の源地なりと言ひ傳ふ、

陶器莊

陶荒田神社

今は西東二村に分れたるが、昔は大村郷陶器莊として、深坂、田園、辻、大、北、府久田、高藏、岩室八村を包めり、往古こゝにて陶器を作れり、故に陶邑といふ、舊事記に大巳貴神、茅渟縣に來りて、

大陶祇の女活玉依姫を娶りしことを載せ、日本紀に崇神帝の時、大物主神（大己貴神の一名）を祭るにつき、その子孫大田々根子を、茅渟縣陶邑に求めて、神主と爲したりしことを記せり、また三代實錄には、貞觀元年四月河内和泉兩國にて陶を焼く爲に、薪を伐る山を争ひしかば、朝使左衛門少尉紀今影等を遣し、これを勘定して、和泉國の地と爲せし由あり、その和泉國とあるは蓋この地なるべし、されば神代より、その頃までは、その地にて盛に陶器を作りしなるべし、後世廢絶して、農家となりぬれど、今も土中より古土器を掘り出すことありといへり、
當村字大村に陶荒田神社あり、式内にて荒田直の祖高魂神劔根命の二座を祭る、後世天神と稱して土生神となす、また字高藏には高

倉寺あり、大集會山天王院と號す眞言宗にて、行基菩薩の開創と爲す、
陶器莊に陶器十景あり、こは領主小出有宗、林羅山に頼みて撰びしものにて、金剛初雪、淡路殘月、萬松風聲、江上漁火、斜日片帆、炭竈孤烟、秋天來雁、池塘春水、編戶壤歌、古寺晚鐘とて、その詩羅山詩集に載せたり、

大津停車場

濱寺の次驛なり、土佐日記に、五日今日からくして和泉の灘より、小津の泊をおふ、松原目もはるくになり、かれこれ困じければよめる、

ゆけとなほ行きやられぬは妹がうむ

をづの浦なる岸の松原

とある、これなり、大津を小津といふは、大原を小原といふに同じ、更科日記には大津の浦とあり

穴師神社

穴師村大字豊中にあり、大津停車場より十八丁なり、府社にて延喜式には、泉穴師神社とあり、祭神は天忍穗耳命、栲幡千千姫命、の二座にて、例祭は陰曆八月十五日なり、本社は歴朝の崇敬いと厚かりしも、戦國を経ていたく、衰頹しければ、慶長七年内大臣豊臣秀頼、これを修理せられ、明治六年に至り郷社に列し、同廿七年更に府社

に昇格したり、本社の建築は古雅にして、寶物も亦多かり、社前の反橋は、住吉に相似たり、昔は社側に神宮寺ありて、薬師寺といひしが、明治に至りこれを廢しつ、

總社 泉井上神社 國府の清水

總社は國府村大字府中にありて、大津停車場より三十丁、穴師社より南十二三丁なり、和泉の五社大鳥、穴師、信太、積川、大井堰を合せ祭りて總社と稱す、本社の祭神は、中央天照大神、左、天忍穗耳尊、鷓鴣草尊不合尊、右、瓊々杵尊、彥火々出見尊の五座なり、初め元正帝靈龜二年、河内國三郡を割きて和泉國を置き、この地に國府を建て、新に國司を任命せり、國司來任して、まづ上社に參

拜奉告して、さて後に政を執る例なりしが、後には府政繁務の爲に、五社を始め、諸社を府中に勸請して、五社惣社と稱せり。歴代の崇敬いとあつかりしも、戰國を経て衰廢しければ、慶長十年豊臣内府秀頼惣社を再營し、式内泉井上神社をも合併して一社となせり、

泉井上神社は、延喜式に載せて、元は井の八幡、または水内社などいひて、國府の清水の上にありしなり、往昔神功皇后三韓より當地に凱陣ありし折、清泉一夜に涌出せり、因て社を靈泉の上にて建て、地を泉郡と名づけ、行宮を造られたり、後に仲哀應神二帝、及び皇后を祭り、征韓從軍の將校四十八人を陪祀して、歷朝の勅願社とせり、社廢するに及び、その清水總社の前に残りて、國府の清水と

呼べり、明治廿八年に至り、總社より分離して、更に井上神社を再興せり、

御館社 || 珍努縣主舊地 || 和泉宮

惣社の東南二丁ばかりに式内和泉神社あり、今俗に上泉の天神といひて、毎年八月十五日に惣社の神輿こゝに渡御せらる、この境内は、昔珍努縣主の居地にして、國廳もこゝに設けられて、代々の國司皆こゝに居たり、されば國府または府中といひて、今も御館森として、方四五十間の松林あり、また元正聖式二帝の離宮珍努宮（一名和泉宮）もこゝにありしなり、